

## 短 報

ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関する  
ケース・スタディ： フィールド・ライブラリアンの活動を中心に

### A Case Study on Learning and Instructional Support Provided by the University Library at the University of Michigan: Focusing on Field Librarians

長 澤 多 代  
*Tayo NAGASAWA*

#### *Résumé*

**Purpose:** The purpose of this paper is to explain the content and context of learning and instructional support provided by field librarians at the University of Michigan. The research question is: How do faculty members and librarians build collaboration in the learning support and instructional support provided by libraries?

**Methods:** This is a descriptive case study presenting a detailed account of the learning and instructional support provided by the field librarians. The data are interview data, archival records, administrative documents, reports, dissertations, data on physical artifacts and observational data.

**Results:** Field librarians are librarians who are out of the library buildings and are embedded in faculties. Their main mission is to provide learning and instructional support to students and faculty members in the faculty. Field librarians were introduced into the Women's Studies Program, the School of Art and Design and the Department of Classical Studies, and were expected to build collaboration between these faculties and libraries. Field librarians have their offices in the faculty and provide learning and instructional support services both for individuals and groups in the faculty. Field librarians identify the needs of students and faculty members through informal communication with them. In the future, the results of this case study will be analyzed based on the grounded theory approach in order to develop a conceptual framework for building collaboration between faculty members and librarians in education.

---

長澤多代：三重大学附属図書館研究開発室，514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

Tayo NAGASAWA: Research Development Office, Mie University Library, 1577 Kurima-machiya, Tsu, Mie 514-8507 Japan

e-mail: nagasawa.tayo@mie-u.ac.jp

受付日：2011 年 11 月 24 日 改訂稿受付：2013 年 2 月 20 日 受理日：2013 年 5 月 11 日

- I. 問題の背景
- II. 研究の方法
  - A. 研究方法
  - B. データ収集・分析の方法
  - C. 研究の意義
  - D. 用語の定義
- III. ミシガン大学と図書館
  - A. ミシガン大学
  - B. ミシガン大学の図書館
  - C. ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援
- IV. フィールド・ライブラリアン
  - A. フィールド・ライブラリアン導入の背景
  - B. 設置のための部局との交渉
  - C. 公募要領
  - D. 業務内容
  - E. 地位
  - F. オフィス
  - G. 他の図書館員との交流
  - H. フィールド・ライブラリアン事業の変化
- V. 研究科におけるニーズの把握
  - A. 女性学研究科におけるニーズの把握
  - B. 芸術・デザイン研究科におけるニーズの把握
  - C. 古典学研究科におけるニーズの把握
- VI. 学生に対する学習活動の支援
  - A. 科目関連の情報利用指導
  - B. 独立科目での指導
  - C. レファレンス・サービス
  - D. 印象づけ
- VII. 教員に対する教育活動の支援
  - A. 新規採用教員の候補者への支援
  - B. 新任教員との面談
  - C. テクノロジー関係のワークショップ
  - D. レファレンス・サービス
  - E. 印象づけ
  - F. コレクションの構築
  - G. 研究科が主催する行事の支援
- VIII. まとめと今後の課題
  - A. まとめ
  - B. 今後の課題

## I. 問題の背景

近年、日本の大学では、18歳人口の減少、グローバル化や情報化などを背景として、3つの方針の策定や単位の実質化など教育の質保証を目指した大規模な改革を進めている。教育の質保証を目指す取り組みには、大学図書館（以下、図書館という）による学生に対する学習活動の支援（学習支援）や教員に対する教育活動の支援（教育支援）によって貢献できる局面が多くあり、学習支援や教育支援のあり方について検討することの重要性が高まっている。

学習支援とのかかわりが深い局面として、アクティブ・ラーニングへの転換がある。中央教育審議会の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」でも、学生の学習を支える環境を更に整備する必要があるとして、図書館の機能強化の必要性についても指摘している<sup>1)</sup>。科学技術・学術審議会の「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」でも、学生が主体的に課題を解決できるようになるために、“大学図書館の利用方法も含めて、情報を探索し、分析・評価し、発信するスキルを一層高める情報リテラシー教育が必要である”との指摘がなされている<sup>2)</sup>。多くの図書館では、この大学教育改革が始まる前から多様な学習支援を実施してきた。永田らの調査では、2006年の時点で、141大学が何らかの情報リテラシー教育を組み入れた授業を行っていることが明らかになっている（調査対象194館の73.4%）<sup>3)</sup>。学習支援の実践と並行して、学習支援に関する研究が、図書館情報学では主に図書館利用教育研究として、国内外で取り組まれてきた<sup>4), 5)</sup>。その中で、授業と図書館利用の関連づけや教員と図書館員の連携がなければ学習支援の成果が十分に得られないことが指摘されている<sup>6)</sup>。米国の大学・研究図書館協会の図書館利用教育部門が2008年に発行した*Information Literacy Handbook*でも、連携（collaboration）の章を設けて、大学教育における教員と図書館員の連携の必要性を指摘している<sup>7)</sup>。

一方、教育支援とのかかわりが深い局面とし

て、ファカルティ・ディベロップメント（FD）がある。2008年の大学設置基準の改正により、各大学でのFDの実施が義務化になり、大学関係者による関心も高まっている。2012年に実施した全国の大学の学長および学部長を対象とした「学士課程教育の現状と課題に関するアンケート調査」でも、「学位授与方針に基づく組織的な教育の改善のためのFD」に取り組んでいる大学が多いこと、これを更に充実させたいと考えている学長や学部長が多いことが明らかになっている<sup>1)</sup>。中央教育審議会の「学士課程の構築に向けて（答申）」では、教員が自主的、自律的に教育改善に取り組めるように、“教員の個人的・集団的な日常的教育改善の努力を促進・支援し、多様なアプローチを組織的に進めていく”<sup>8)</sup>ことの必要性を指摘している。図書館が実施する教育支援の目的は、教員の教育改善を促進したり支援したりすることである。教育支援によって図書館の学習・教育支援機能や学習支援への教員の理解を深めることが、教員と図書館員の連携を促し、高い学習成果を得られる学習支援の実現、学習成果の向上につながる。教育支援に関する研究についても、学習支援と同様に、図書館利用教育研究として国内外で取り組まれている。国外では実践報告や実践研究が見られ<sup>9)</sup>、国内では実践報告が見られる<sup>10)</sup>。

学習支援や教育支援に関する研究の中で、大学教育における教員と図書館員の連携に焦点をあてた研究がある。主な研究として、Branscomb<sup>11)</sup>、Knapp<sup>12)</sup>、Farber<sup>13)</sup>、Hardesty<sup>14)</sup>、Julienら<sup>15)</sup>のものがある。いずれも、大学教育における教員と図書館員の連携のあり方について研究することの重要性を指摘している。

本研究の目的は、大学教育における教員と図書館員の連携に関する次の研究課題を明らかにすることである。

- ① 図書館が実施する学習支援や教育支援において、教員と図書館員はどのように連携しているのか。
- ② 図書館員の教員に対するアプローチの中で、何が教員と図書館員の連携の構築を

促す要因となっているのか。

③ 教員と図書館員の連携の構築を促す図書館内外の要因は何か。

この3つの研究課題について、テーマ的コード化という比較研究の手法を用いて複数のケースに共通する要素と相違する要素を分析し、汎用性の高いモデルを構築する。これまでに、①および②の一部については、米国のアールム・カレッジ（Earlham College）の記述的および解釈的ケース・スタディによって明らかにしている<sup>16), 17), 18)</sup>。本稿の目的は、米国のミシガン大学（University of Michigan）のフィールド・ライブラリアン（field librarian）の記述的ケース・スタディによって、①を明らかにすることである。本稿によって、教員と図書館員の連携の構築に影響を与える要因について、アールム・カレッジその他のケース・スタディと比較研究をするための基礎的なデータを得ることができるとともに、これまでに日本で紹介されていないフィールド・ライブラリアンに関する基本的な情報を提供することができると考えている。

全体はVIII章からなる。第I章では、問題の背景、研究課題について説明した。第II章で研究の方法について説明し、第III章でミシガン大学、図書館、図書館が実施する学習支援および教育支援について概説する。第IV章でフィールド・ライブラリアンが導入された背景や業務内容等について説明し、第V章から第VII章でフィールド・ライブラリアンが実施する学習支援および教育支援について詳述する。第VIII章では、全体を要約し、今後の課題を述べる。

## II. 研究の方法

### A. 研究方法

本稿で明らかにする研究課題は「図書館が実施する学習支援や教育支援において、教員と図書館員はどのように連携しているのか」である。この研究課題を質的なケース・スタディによって明らかにする。より具体的には、ほとんど調査が行われていない領域の基本的な情報を提供するのに有用な手段である記述的なケース・スタディに

よって明らかにする<sup>19)</sup>。大学図書館が実施する学習支援と教育支援を両面から取り上げた研究は国内ではほとんど見られないために、記述的なケース・スタディによって基本的なデータを提供することは有効だと考えられる。本稿の目的は、フィールド・ライブラリアンの実態を詳細に記述することであり、理論を構築することでも仮説を検証することでもない。

質的なケース・スタディの主な目的は、研究対象の諸集団を包括的に理解すること、社会構造や社会過程の規則性に関する一般的で理論的な論述を生み出すことである<sup>20)</sup>。本稿では、記述的ケース・スタディによって、前者の目的である対象の全体像を理解することを目指している。具体的には、ミシガン大学のフィールド・ライブラリアンが実施する学習支援および教育支援の全体像を明らかにすることである。

### B. データ収集・分析の方法

#### 1. ケースのサンプリング

ケースは目的サンプリングによって抽出した。最大の多様性をもつサンプルとして、教員と図書館員が多様な文脈で連携しているケースを選択した。Merriamによる次の指摘により、このサンプリングの採択が本研究の目的を達成するのに有効だと考えたからである。

グラウンデッド・セオリーは、ある現象のより幅広い事例に「根ざした」ときに、概念的により緻密で潜在的により有効なものになると考えられていた。「より多様性を持った少数のサンプル」からの調査結果こそが、「諸ケース間をつらぬく重要な共有パターン」を生み出す<sup>20)</sup>。

サンプルの選択基準については、本研究課題を研究するためのベンチマークとしたアールム・カレッジのケース・スタディをもとに設定した。具体的な選択基準は次のとおりである。

- ① 図書館員が教員と連携して学習支援を実施している大学

② 図書館員が教育支援を実施している大学

③ 図書館員が大学内の部局と連携して学習支援または教育支援を実施している大学

①の基準は図書館が実施する学習支援において教員と図書館員がどのように連携しているのか、その実態を明らかにするために重要である。アーラム・カレッジでは、1960年代より、図書館員が教員と連携して科目関連の情報利用指導（以下、科目関連指導という）を実施し、学習成果を向上させている<sup>16)</sup>。②の基準は図書館による教育支援が両者の連携の構築にどのような影響を与えているのか（与えていないのか）を明らかにする上で重要である。アーラム・カレッジでは、新任教員や現職の教員を対象として多様な教育支援を実施している。教育支援によって図書館の学習・教育支援機能や図書館員の役割について理解を深めた教員が、担当する授業科目に科目関連指導を導入するようになってきている<sup>16)</sup>。③の基準は他部局との連携が教員と図書館員の連携の構築にどのような影響を与えているのか（与えていないのか）を明らかにする上で重要である。アーラム・カレッジでは、大学内の部局と連携して、新規採用教員の候補者への面談、新任教員のためのオリエンテーション等を実施している。ここでも、②と同様に、図書館への理解を深めた教員が図書館員と連携するようになってきている<sup>16)</sup>。

2002年3月に実施していた訪問調査の結果から<sup>21)</sup>、米国の研究大学であるミシガン大学が以上の選択基準に合致することが明らかになったために、採択した。具体的には、①について教員と図書館員が連携して英語科目で科目関連指導を実施していること、②について図書館関係者が教員を対象に日常的なワークショップを実施していること、③について図書館を含む学内の教育研究支援組織の連合体であるTTC (Teaching and Technology Collaborative) が研修週間 (Enriching Scholarship) を開催していることなどがある<sup>21)</sup>。

ミシガン大学には、大学院生用図書館や学部学生用図書館のほかにも多数の図書館があり、主題専門図書館員その他の図書館関係者が学習支援や

教育支援を実施している。本研究では、調査を進める過程で、フィールド・ライブラリアンの活動に焦点をあてることとした。その理由は、フィールド・ライブラリアンの主な役割が教員との連携を構築することであり、多様な文脈で教員と連携をしているからである。

ミシガン大学の図書館が実施する学習支援に関する先行研究は米国にいくらかみられる<sup>22)</sup>。だが、教育支援や教員と図書館員の連携について正面から取り組んだ研究は国内外ともにほとんど見られない。フィールド・ライブラリアンに関する論文は、まだほとんどなく、当事者による事例報告がいくらか見られるのみである<sup>23), 24)</sup>。

## 2. ケース内のサンプリング

ミシガン大学では、本研究の計画以前の2002年3月10日から20日に訪問調査を実施している<sup>21)</sup>。ここで収集したデータについては、前述のように、本研究のケースのサンプリングに使用した。

本研究の計画後には、5回の訪問調査を実施した。第1回は2004年5月12日から14日、第2回は2004年6月から7月の間に複数回、第3回は2006年11月9日から15日、第4回は2007年12月4日から7日、第5回は2012年9月26日から28日である。第1回には、フィールド・ライブラリアンの活動を含むミシガン大学の図書館が実施する学習支援と教育支援の全般について調査した。第2回以降は、フィールド・ライブラリアンに焦点をあてて、フィールド・ライブラリアンに支援を受けた経験を持つ教員、フィールド・ライブラリアンの設置に携わった図書館関係者を中心に調査をした。収集の対象はミシガン大学に関する次のデータである。

- ① 聞き取りの対象者：フィールド・ライブラリアン、フィールド・ライブラリアンの設置に携わった図書館関係者、フィールド・ライブラリアンが実施する学習支援もしくは教育支援を受けた経験を持つミシガン大学の教員（第1表）<sup>25)</sup>



第1表 聞き取りの対象者

記号	対象者	担当する部局（図書館員） 所属（教員）	聞き取りに 要した時間	調査日	性別
A	利用サービス担当の部長		48 分	2007.12.5.	女
B	フィールド・ライブラリアン	女性学研究科	33 分 82 分	2004.5.13.* 2004.6.29.	女
C	フィールド・ライブラリアン	芸術・デザイン研究科	33 分 75 分 105 分	2004.5.13.* 2004.6.22 2012.9.26.	女
D	フィールド・ライブラリアン	古典学研究科	33 分 95 分 120 分 60 分 80 分	2004.5.13.* 2004.6.22 2007.12.5 2012.9.27. 2012.9.28.	男
E	教員	芸術・デザイン研究科	42 分	2006.11.9.	女
F	教員	芸術・デザイン研究科	40 分	2006.11.14.	男
G	教員	古典学研究科	20 分	2007.12.5.	男
H	教員	ドイツ語学科	34 分	2007.12.6.	男
I	フィールド・ライブラリアン	映画学科	70 分	2012.9.27.	男
J	図書館員	健康科学図書館	90 分	2012.9.28.*	女
K	図書館員	健康科学図書館	90 分	2012.9.28.*	女

\*はグループ・インタビュー

② 観察対象：フィールド・ライブラリアンの活動範囲における物理的環境

③ 分析する情報：ミシガン大学もしくはミシガン大学の図書館に関する資料記録、管理文書、統計資料、広報誌に掲載された記事、ミシガン大学の図書館が実施する学習支援や教育支援に関する事例報告・雑誌論文・学位論文・単行書

聞き取りの手法は半構造化インタビューである。この手法は自由回答による質的なデータを得るのに適している。半構造化インタビューのうち、主に、焦点を合わせたインタビューの手法を用いている。焦点を合わせたインタビューの主な目的は、同一の刺激が与えられた後、それが情報提供者に与えた影響をインタビュー・ガイドを用いて明らかにすることである<sup>26)</sup>。本研究では、フィールド・ライブラリアンの導入によって、図書館員（ここでは、フィールド・ライブラリアン）が学習支援や教育支援をどのように計画した

り実施したりするようになったのか、教員との連携をどのように構築するようになったのか、教員が図書館（員）観をどのように変化させたのか、などを明らかにしようとしている。

聞き取りの対象者は、第1回の調査では、調査内容を事前に送付し、それをもとにミシガン大学の図書館関係者が紹介した図書館員である。第1回の調査時の情報提供者に、フィールド・ライブラリアンが含まれていた。第2回以降の調査対象は、フィールド・ライブラリアン及びフィールド・ライブラリアンが紹介した研究科の教員や図書館関係者である（第1表）。フィールド・ライブラリアンが他大学に異動し、その後に廃止になった研究科もあったために、研究科の教員の紹介について協力を得られたのは3つの研究科のうち2つの研究科であった。

主な質問内容は次のとおりである。

① フィールド・ライブラリアンへの質問  
・学習支援及び教育支援の計画・実施

第2表 インタビュー・ガイド

フィールド・ライブラリアンへの質問	教員への質問	利用サービス担当の部長への質問
<p>○学習支援や教育支援について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援をどのように計画・実施しているのか。その中で、教員とどのように連携をしているのか。</li> <li>・教育支援をどのように計画・実施しているのか。</li> </ul>	<p>○学習支援や教育支援について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フィールド・ライブラリアンからどのような学習支援や教育支援を受けてきたのか。</li> <li>・学習支援の中でフィールド・ライブラリアンとどのように連携をしているのか。</li> <li>・学習支援を受けた結果、学生や教員にどのような影響があったのか。</li> <li>・フィールド・ライブラリアンと、どこで交流をしているのか。</li> <li>・フィールド・ライブラリアンと他の図書館員との違いは何か。</li> </ul>	<p>○フィールド・ライブラリアンの導入について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜフィールド・ライブラリアンを導入しようと思ったのか。</li> <li>・フィールド・ライブラリアンというアイデアを何から得たのか。</li> <li>・フィールド・ライブラリアンの導入について、大学にどのように働きかけたのか。</li> <li>・フィールド・ライブラリアンを導入するための予算をどのように獲得したのか。</li> <li>・フィールド・ライブラリアンを導入する部局をどのように決めたのか。</li> <li>・フィールド・ライブラリアンに、どのような資質を求めたのか。</li> <li>・今後、他の部局でもフィールド・ライブラリアンを導入する可能性はあるか。</li> </ul>
<p>○教員からのフィードバックについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援や教育支援を利用した教員からどのようなフィードバックを得たか。</li> </ul>	<p>○図書館の利用経験について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生時代（学士課程、大学院課程）に、どのように図書館を利用したり学習支援を受けたりしてきたのか。その時に図書館や図書館員についてどのような印象を持っていたのか。</li> </ul>	
<p>○必要となる専門知識や技能と資質開発について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援や教育支援を計画・実施するために必要となる専門知識や技能は何か。それをどのように習得しているのか。</li> </ul>	<p>○図書館（員）観について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フィールド・ライブラリアンの着任後に、図書館や図書館員に対する印象は変わったか。</li> </ul>	
<p>○部局の関係者との交流について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援や教育支援を実施するために、部局内でどのような活動をしたのか。</li> <li>・部局の内外で教員とどのように交流しているのか。</li> </ul>		

- ・教員からのフィードバック
- ・必要となる専門知識や技能と資質開発
- ・部局の関係者との交流

## ② 教員への質問

- ・学習支援及び教育支援を受けた経験
- ・図書館の利用経験
- ・図書館（員）観

## ③ 利用サービス担当の部長への質問

- ・フィールド・ライブラリアンの導入の背景

質問の具体的な内容はインタビュー・ガイドのとおりである（第2表）。必要に応じて、これ以外の内容についてもたずねている。聞き取った内容の確認や追加の質問のために、電子メールでも質問をした。聞き取りの対象者、属性、要した時間等は第1表のとおりである。第Ⅲ章以降で聞き取りの内容を参照したり引用したりした場合には、各データの最後に、その対象者を第1表の記号を

もとに（A）や（B）として記すこととする。

## C. 研究の意義

本研究が設定する3つの研究課題について、「①図書館が実施する学習支援や教育支援において、教員と図書館員はどのように連携しているのか」を記述的ケース・スタディ（本稿）で明らかにし、「②図書館員の教員に対するアプローチの中で、何が教員と図書館員の連携の構築を促す要因となっているのか」及び「③教員と図書館員の連携の構築を促す図書館内外の要因は何か」を今後の解釈的ケース・スタディで明らかにすることにより、図書館情報学の分野に、次の点から貢献できると考えている。

- 1) 大学教育における教員と図書館員の連携の構築について、今後を予測したり、その背景を説明したりする。
- 2) 学習支援及び教育支援に関するひとつの

理論（モデル）を示すことにより、図書館情報学の理論的前進に役立てる。

- 3) 図書館関係者が学習支援及び教育支援を実施するのに役立つ情報を提供する。
- 4) 学習支援及び教育支援に関する研究について、ひとつの観点を提供する。
- 5) 図書館（館種を問わず）とこれが属する組織の関係を研究するひとつの方法を提示する。

本稿では、これまでにほとんど研究されていないフィールド・ライブラリアンに関する基本的な情報を提供することによって、上記のうち、主として、3) の達成に貢献することができる。これに加えて、他の4つを達成するための基礎的なデータを提供できると考えている。

#### D. 用語の定義

本稿で使用する用語のうち、情報リテラシー、学習支援、教育支援、フィールド・ライブラリアンの定義を説明する。

情報リテラシーには、多様な定義がある。ここでは、大学生が“問題を解決するために情報を主体的に活用する能力”<sup>27)</sup>という意味で用いている。図書館の活用に限定することなく広く情報にかかわる能力であり、情報が必要であるという認識、情報を効果的に探索・収集、整理・分析、表現・発信する知識や技能を含む。情報リテラシーの習得・向上を支援する多様な活動を情報リテラシー教育という。

学習支援という語は、図書館が実施する学生に対する学習活動の支援の総称として用いている。学生が授業科目の履修その他に必要な学習を進めたり、情報リテラシーを習得したり向上させたりするのを支援する多様な活動を含む。本稿では、図書館が実施する情報リテラシー教育の総称と同義で用いている。

教育支援という語は、図書館が実施する教員に対する教育活動の支援の総称として用いている。教員が教育活動を効果的に実施したり、必要になる情報リテラシーを習得したり向上させたりするのを支援する多様な活動を含む。前述のように、

近年、日本の大学ではFDとして、組織的な教育開発に取り組んでいる。FDには、リーフレット等による案内、授業設計や運営に関するワークショップ、大学や部局の教育目標の設定を含む多様な活動がある<sup>28)</sup>。本稿では、教育支援を、図書館が実施するFDと捉えている。

フィールド・ライブラリアンは、特定の部局の教員や学生に学習支援や教育支援などの図書館サービスを提供するために、部局に派遣される図書館員である。他の図書館員との違いは、派遣される部局にオフィスを持ち、その部局の構成員を支援の主な対象とすることにある。“日常の業務において、図書館を離れ、利用者が活動している場から、利用者と活動をともしつつ情報サービスを提供”<sup>29)</sup>する図書館員であるエンベディッド・ライブラリアン（embedded librarian）と同義である。

### III. ミシガン大学と図書館

#### A. ミシガン大学

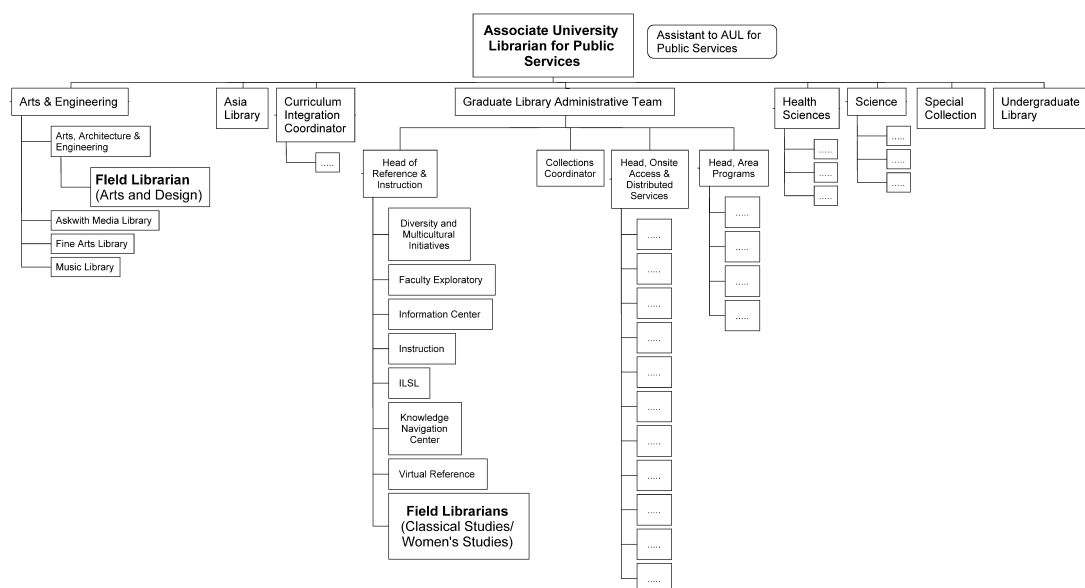
ミシガン大学は、1817年に北西部地方で初めて設立された州立（設立時は公立）の研究大学である。ミシガン大学は3つのキャンパスを持つ。ミシガン州のアナーバー（Ann Arbor）に中央キャンパスと北キャンパスをもつ他に、ディアボーン（Dearborn）とフリント（Flint）にそれぞれキャンパスを持つ。2011年の世界の大学のランキングでは、14位に位置づけられた<sup>30)</sup>。

研究科及び学部は、アナーバーのキャンパスに19、ディアボーンに4、フリントに5ある。3つのキャンパスを合計して、56,857名の学生、9,266名の教育職員（instructional staff）、30,654名のフルタイム（regular, non instructional staff）の職員がいる。図書館では、管理職や管理部門、大学出版会の関係者も含めて491名が働いている<sup>31)</sup>。そのうち、主題専門図書館員（subject librarian、以下、図書館員という）は85名いる<sup>32)</sup>。

#### B. ミシガン大学の図書館

ミシガン大学には、大小あわせて20以上の





第1図 ミシガン大学図書館の組織体系 (2005年9月)

図書館がある<sup>33)</sup>。中央キャンパスには、学部学生用図書館 (Shapiro Library) と大学院生用図書館 (Hatcher Graduate Library) に加えて、健康科学図書館 (Taubman Health Sciences Library)、法学図書館 (Law Library) などがある。北キャンパスには、芸術・建築・工学図書館 (James and Anne Duderstadt Center 内にある Art, Architecture and Engineering Library、以下、北キャンパス図書館という) などがある。本稿では、中央キャンパスにある学部学生用図書館と大学院生用図書館をまとめて中央図書館と表記する。

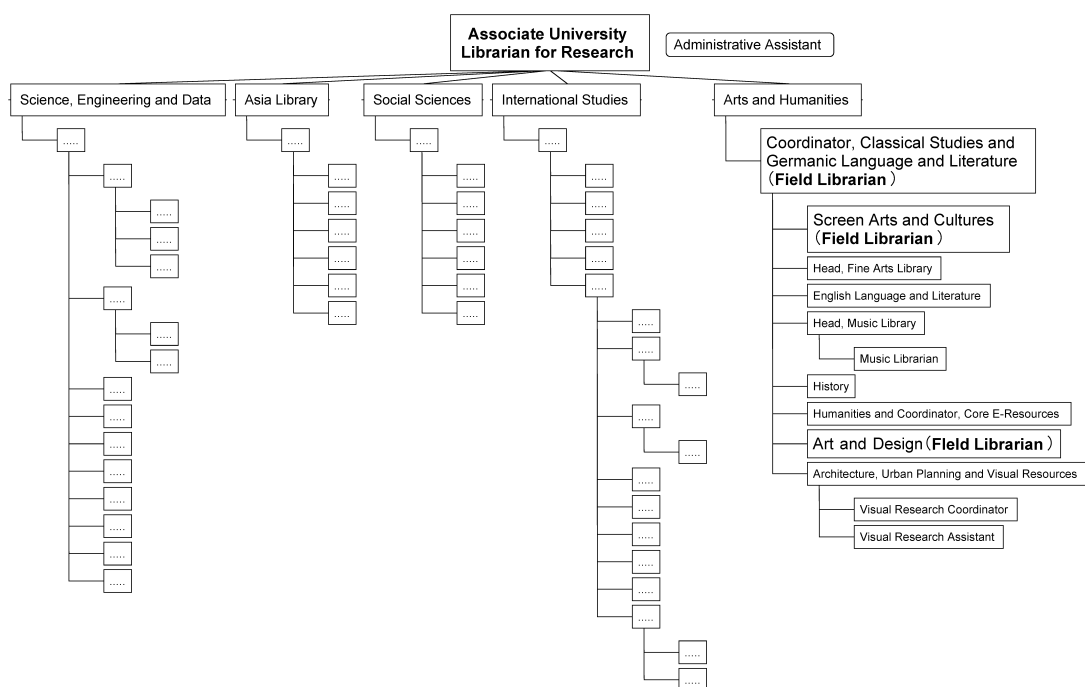
図書館には、フィールド・ライブラリアンの計画をした2001年当時、3名の部長がいた。コレクションの構築と研究者コミュニケーションの担当、図書館の情報テクノロジーと整理・受入サービスの担当、利用サービスの担当である<sup>34)</sup>。このうち、利用サービス担当の部長がフィールド・ライブラリアンの導入を提案した。以下、部長という表記は利用サービス担当の部長を意味する。

当時、利用サービス部には、大学院生用図書館の総務課の他に、学部学生用図書館、芸術・工学

図書館、アジア図書館、カリキュラム統合・調整課、健康科学図書館、自然科学図書館、特別コレクション課があった。大学院生用図書館の総務課には、レファレンス・指導係、コレクション構築係、オンサイトアクセス・閲覧サービス係、地域プログラム係があった (第1図)<sup>35)</sup>。レファレンス・指導係には、18名の図書館員、3名の学生スタッフ、2名の秘書がいた (D)<sup>36)</sup>。2002年に着任した3名のフィールド・ライブラリアンのうち、2名はレファレンス・指導係に所属し、1名は芸術・工学図書館に所属した (第1図)。1名だけ所属が異なることに特別な意味はない (A)。2012年10月に再編された中央図書館の組織体系では、3名のうち、1名が昇進して管理職になり、1名がその下に位置づけられた<sup>37)</sup>。もう1名については、2007年に転出している。2008年には、フィールド・ライブラリアンが1名増員され、この1名もその管理職の下に位置づけられた (第2図)。

図書館員には、常勤と非常勤ともに、Assistant Librarian, Associate Librarian, Senior Associate Librarian, Librarian という4つの職位がある。

ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ： フィールド・ライブラリアンの活動を中心に



第2図 ミシガン大学・中央図書館の組織体系（2012年10月）

Assistant Librarian 以外の図書館員はファカルティの地位を持つ<sup>38), 39)</sup>。図書館員は、1968年2月に、大学のファカルティ（university senate）の一員として正式に承認された<sup>40)</sup>。同様の地位にあるのは、博物館の学芸員、アーキビストなどである。著作物の発表を義務づけられる教員以外のファカルティもいるが、図書館員にその義務はない。著作物を発表している図書館員もいるが、個々の自発的な活動による（D）。

図書館員の昇進については、各図書館員が自発的に申請する。昇進の基準は図書館によって異なるが、ディアボーン図書館では、Assistant Librarian が Associate Librarian に昇進するためには、少なくとも3年の勤務経験が必要になる。Associate Librarian から Senior Associate Librarian への昇進には4年、Senior Associate Librarian から Librarian への昇進には6年が必要になる。いずれの場合も、勤務経験以外に、ディアボーン図書館以外の図書館専門職員および図書館以外の

ミシガン大学の関係者が作成した推薦状が求められる。Librarian に昇進するためには、少なくともディアボーン図書館以外の4名の図書館専門職員による推薦状と、5名のミシガン大学の関係者による推薦状が必要になる<sup>41)</sup>。

### C. ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援

学習支援や教育支援を担当するのは、レファレンス・指導系の図書館員である。図書館員には、リエゾン・ライブラリアン、フィールド・ライブラリアンも含まれる。これ以外に、教育支援を主に担当する職員として、Faculty Exploratory の専門職員がいる。Faculty Exploratory は、教員がテクノロジーを活用して教育活動や研究活動に効率かつ効果的に取り組めるように支援することを主な役割とする。以前は独立した教育研究支援組織であったが、現在は図書館内の組織となっている<sup>42)</sup>。

中央図書館が提供する主な学習支援として、新入生のオリエンテーション<sup>43)</sup>、科目関連指導<sup>44), 45)</sup>がある。主な教育支援として、新任教員のオリエンテーション (F)、日常的に実施するワークショップ<sup>46)</sup>、学内の教育研究支援組織による連合体 (TTC) が多様なワークショップを一斉に開催する研修週間<sup>47)</sup>がある。

図書館には、図書館員の資質開発を支援する組織 (Instructor College) がある。2001 年に設置され、図書館員の指導スキルの向上を支援するプログラムを提供している<sup>48)</sup>。その取り組みは、情報リテラシー教育に貢献したとして、2003 年に、米国大学図書館協会の指導部門が認定する賞 (Innovation in Instruction Award) を受賞した<sup>49)</sup>。近年では、情報リテラシー教育に関する図書館内の委員会が発足している。5 つの委員会からなり、インストラクション、マーケティングやオリエンテーション、評価、e ラーニングの部会があり、それぞれの課題を検討している。図書館員だけでなく、技術職員や高等教育開発に従事する専門職員など学内の教育研究支援組織の職員も委員になったり参加したりしている<sup>50)</sup>。また、情報リテラシー教育のためのオンライン・コミュニティ (Instructor College Café) も組織され、情報リテラシー教育に関する多様な情報を交換したり、リポジトリの構築によって学習支援の教材、配布資料、計画案等の共有を図ったりしている (D)<sup>51)</sup>。

#### IV. フィールド・ライブラリアン

##### A. フィールド・ライブラリアン導入の背景

ミシガン大学の図書館がフィールド・ライブラリアンを設置したのは2002年1月である。設置のきっかけは、利用サービス担当の部長が、図書館員と部局との連携が十分でないために、図書館員が教員の教育活動や研究活動と一体化して活動する方法について検討したことである。その背景には、図書館を取り巻く大学の環境が変化し、競合するニーズを協議し限られた予算を割り当てることが求められるようになる中で、図書館も図書館サービスへのアプローチを改善する方法を模索

するようになったことがある。これに加えて、伝統的な枠組みにとらわれないサービスのあり方を検討する中で、主題専門の図書館員 (subject specialist) と教員のコミュニティが綿密な連携を図ることが重要になると考えるようになったことがある<sup>24)</sup>。

部長は、図書館員と教員のコミュニティとの連携を実現するために、米国内の大学の取り組みについて調査をした。その中で、南カリフォルニア大学 (University of Southern California)、バージニア工科大学 (Virginia Polytechnic Institute and State University)、ワシントン州立大学 (Washington State University) などいくつかの大学が専門職員やテクノロジーの知見を出張コンサルテーションなど部局の教員や大学院生への支援と結び付けていることを知った<sup>24)</sup>。具体的には、南カリフォルニア大学では、ソーシャル・ワークと教育学の分野にフィールド・ライブラリアンがおり、バージニア工科大学では、学芸、社会科学、人文科学、ビジネス、教育学、人間開発、農業の分野にフィールド・ライブラリアンがいる<sup>23)</sup>。この中心にあるのは、専門職員の活動を教員のいる場所や部局のある場所に移動させるという考えである。そこで、ミシガン大学でも、図書館員を部局に派遣し、この図書館員がその部局内で学生や教員を支援することを考案した。その図書館員がフィールド・ライブラリアンである。そして、そのポストの新設を研究担当の副学長に要求した<sup>24)</sup>。

副学長 (provost office) が、この案に賛同し、3名のフィールド・ライブラリアンを雇用するための予算を立てた (A)<sup>24)</sup>。具体的には、毎年、図書館を含む学内の教育研究支援組織が副学長に予算要求をする。フィールド・ライブラリアンの新設時には、予算要求時に通常の項目にその経費を追加して要求し、認められた。副学長には、運営のための基本的な教育研究支援経費と特定の事業等に計上する裁量経費を決定する権限がある。副学長が教育研究支援経費としてその経費を認めたために、図書館内で予算を調整することなく、フィールド・ライブラリアンを雇用することがで

ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ：フィールド・ライブラリアンの活動を中心にきた<sup>52), 53)</sup>。

## B. 設置のための部局との交渉

副学長が人件費を提供し、フィールド・ライブラリアンを受け入れる部局がオフィスと電話や机、コンピュータ等の備品、出張費を提供し、図書館がその管理を担うことを前提として、フィールド・ライブラリアンを設置する部局を決めることになった<sup>24)</sup>。

フィールド・ライブラリアンを設置する部局として、部長は、まず、生物学関係の部局を考えた。その理由は、貸出記録や科目関連指導の実施数等のデータによって、生物学の関係者が、資料の多くを電子資料として利用できるために、図書館に足を運ばなかったり、物理的な図書館が必要であると考えていなかったりすることを感じていたからである。部長は、フィールド・ライブラリアンの設置によって、生物学の関係者が図書館の有用性を理解するよい機会になると考えた。そこで、フィールド・ライブラリアンの設置を打診したが、賛意を得られなかった (A)<sup>52)</sup>。

次に、女性学研究科 (Women's Studies Program) に打診をした。女性学が学際的な領域であるために、歴史や言語学を担当する図書館員が図書の購入等を担当してきたが、女性学の分野に特化した主題専門の図書館員はいなかった。そのために、部長は、部局の関係者が図書館のサービスを十分に受けていないと思っているのではないかと心配していた。そこで、フィールド・ライブラリアンの設置について女性学研究科に打診した。その結果、研究科長が快諾して、設置することが決まった (A)。

芸術・デザイン研究科 (School of Art and Design) について、以前には、研究科内に図書館があったが、メディア・ユニオン (現在の北キャンパス図書館) を新設するときに統合されていた。研究科内に図書館があったときには芸術・デザインを担当する図書館員が常駐していたが、定年退職した後は、後任が補充されないうまでいた (C)<sup>54)</sup>。このような経緯があったために、部長は、芸術・デザイン研究科の関係者が何らかの

喪失感をもっていると考えた。実際に、芸術・デザイン研究科の関係者が図書館関係の支援が必要だと考えていたために、フィールド・ライブラリアンを設置することが決まった (A)。

古典学研究科 (Department of Classical Studies) にフィールド・ライブラリアンを導入した経緯について、部長の記憶は定かではない (A)。だが、他の2つの研究科と同様に、主題専門の図書館員が設置されていなかったことなど、これまでに図書館関係の支援が十分に行き渡っていなかったという考えが主な理由としてあったようである (D)。

以上の経緯によって、最終的に、女性学研究科、芸術・デザイン研究科、古典学研究科にフィールド・ライブラリアンを配置することを決定した。これらの部局では、フィールド・ライブラリアンを教育プロセスに従事する図書館員と考えた (D)。いずれの研究科についても、学士課程、大学院課程を含む。本稿では、いずれかに特定した事項でない場合には、研究科という表現に統一する。

## C. 公募要領

次に、フィールド・ライブラリアンの公募要領をそれぞれの研究科長と部長が共同で作成し、3名のフィールド・ライブラリアンを公募した。公募要領の内容については、研究科によって異なる部分がある (A)。作成した公募要領については、アメリカ図書館協会が発行する諸雑誌に加えて、*Chronicle of Higher Education* に掲載した<sup>55)</sup>。

女性学研究科の公募では、公募要領の冒頭に、「女性学研究科を支援すること」という一文がある。これに続いて、フィールド・ライブラリアンのオフィスを女性学研究科の建物内に設置すること、女性学関係のコレクションの構築を担当すること、教員や大学院生の研究の相談にのること、女性学関係の情報資源の効果的な利用法や教育・研究に必要な新しいテクノロジーの効果的な利用法に関する科目関連指導やワークショップを提供すること、という説明がある。

女性学研究科のフィールド・ライブラリアンの応募資格は次のとおりである<sup>56)</sup>。

- ・アメリカ図書館協会の認可校が発行する図書館学もしくは情報学の修士の学位、もしくは、同等の教育及び図書館の経験
- ・女性学に関する学問分野の修士もしくは博士の学位
- ・1 か国以上の外国語の能力
- ・人文学及び社会科学分野の研究に関する書誌ツールや情報源に関する知識
- ・異なるコミュニティへの利用サービスの関与
- ・研究や教育にテクノロジーを応用することの経験や関心

公募対象となった職位は、応募者の経験や業績にもよるが、Associate Librarian もしくは Senior Associate Librarian である。専門的資質の開発の機会、交通費、教職員組合への加入が保証されている<sup>56)</sup>。

芸術・デザイン研究科の公募では、公募要領の冒頭で、「芸術・デザイン研究科の専属で、研究科内でコンサルテーションをしたり芸術分野の新しいサービスを導入したりすること」を期待している。また、ミシガン大学の図書館と芸術・デザイン研究科が共同でこの職を用意したという説明もある。業務内容は、芸術・デザイン研究科とメディア・ユニオンで利用サービスに従事すること、図書館全体の活動に参加することであるとして、具体的には、次のように提示している<sup>57)</sup>。

- ・アトリエ芸術、グラフィックデザイン、工業デザイン、科学イラストその他の新しいジャンルを支援するためにコレクションを構築したりレファレンス業務に従事したりする
- ・刷新的な新しいサービスやプロジェクトを計画、実施、評価する
- ・図書館利用教育、オリエンテーション、アウトリーチサービスを提供する
- ・ミシガン大学の構成員によるコレクションやサービスへのアクセスを向上させるネットワーク環境において図書館員と教員が協働する

- ・図書館コレクションのビデオ制作者を監督する<sup>58)</sup>

これに加えて、必須条件と望ましい条件を示している。必須条件は次のとおりである。

- ・アメリカ図書館協会の認可校が発行する図書館情報学の修士の学位 (MLS)
- ・芸術、芸術史もしくは関連する分野の学士の学位 (BFA/BA)
- ・大学図書館での3年以上の勤務経験
- ・芸術図書館員としての勤務経験
- ・オンライン・レファレンスの技能
- ・コレクション構築の経験
- ・文化的に多様な背景を持つ教員、学生、職員と一緒に働く情報専門職の一員として効果的に業務を遂行する能力

望ましい条件は次のとおりである。

- ・アトリエ芸術、芸術史その他の関連分野の上級学位
- ・新しいサービスを計画・実施する能力
- ・管理業務の経験
- ・インストラクショナル・テクノロジーや電子メディアの利用経験
- ・教育経験

古典学研究科についても、同様の公募要領であった。

審査の結果、女性学研究科、芸術・デザイン研究科、古典学研究科に各1名のフィールド・ライブラリアンを採用した。採用した3名のフィールド・ライブラリアンは、いずれも他大学の図書館員であった。女性学研究科を担当するフィールド・ライブラリアンはワシントン D.C. にある女性学関係の機関 (American Association of University Women Educational Foundation) の図書館員であった。女性学を副専攻とする図書館情報学の修士、女性学関係の準学士を持つ<sup>59)</sup>。芸術・デザイン研究科を担当するフィールド・ライブラリアンは心理学の学士、図書館情報学の修士、応用芸術の準学士を持つ<sup>60)</sup>。これに加えて、アトリエ芸術に関する経験を持ち、芸術史に関する大学院レベルの授業科目を2科目履修していた。図書館情報学の修士の学位を取得



したのは1997年である。1997年から2001年までは、セントラル・ミシガン大学（Central Michigan University）で社会科学を担当する図書館員（reference librarian）であった。それ以前の1991年から1997年まではミシガン州立大学（Michigan State University）で芸術図書館のアシスタント（library assistant）を務めていた（C）<sup>54）、61）</sup>。古典学研究科を担当するフィールド・ライブラリアンは古典学を担当する図書館員であった。1993年から1995年まではインディアナ大学（Indiana University）に、1996年から2001年まではオハイオ州立大学（Ohio State University）に務めていた。イタリア語と古典語を副専攻とする英語学の学士、図書館情報学の修士、ギリシア語とラテン語を副専攻とする比較文学の修士を持つ<sup>62）、63）</sup>。

部長は、この3名を採用するときに、テクノロジーを高いレベルで利用できたり、担当する研究科の専門分野に関する知識を持っていたりすることに加えて、教員や学生のいる環境で快適に働くことができる社交的なパーソナリティを持っていることを重視した。その背景に、図書館員が図書館内にとどまって教員や学生と交流をせずにいると、研究、コレクション、サービスに関する観点が限定されたものになり、広い視野にもとづいて考えられなくなるという懸念があったからである（A）。

#### D. 業務内容

フィールド・ライブラリアンの所属は図書館であるために、他の図書館員と同様に、図書館が運営する委員会、レファレンス・デスクの担当など、中央図書館での業務がある。芸術・デザイン研究科は北キャンパスにあるために、中央図書館ではなく、北キャンパス図書館での業務になる。また、研究科内での活動内容等については、中央図書館に報告することになっている（D）。フィールド・ライブラリアンの業務内容を整理すると、次のようになる<sup>24）</sup>。

- ① コレクションを構築する。
- ② 図書館が主催する委員会に参加する。

③ レファレンス業務を担当する。

④ 学習支援を担当する。

⑤ 部局が決定した業務を遂行する。

①及び④の業務について、専門分野という文脈で個々の教員や学生のニーズに焦点をあてて支援をすることが強く求められている<sup>24）</sup>。

②について、古典学研究科のフィールド・ライブラリアンは、相互貸借委員会（2004）、昇進審査委員会（2004～2007）、電子資源に関する委員会（2005～2006）の委員を務めている。昇進審査委員会は選出型の委員会、委員として選出され、2005年から2006年には座長を務めた。相互貸借委員会でも座長を務めたことがある。その他、多数の委員会や特別委員会の委員にもなっている。これに加えて、2003年から古典学研究科の図書館委員会の委員となり、2004年以降は座長を務めている<sup>62）</sup>。芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンは、2012年の時点では、図書館関係の委員会には所属せず、大学の委員会である教員のためのニュースレターを企画・運営する委員会のみにも所属している。図書館内では、これまでに、学習コミュニティ委員会（2009～2011）、サーチャー委員会（2009）、図書館の多様性委員会（2006～2009）、昇進審査指名委員会（2007）、施設委員会（2005～2007）を含む約20の委員会の委員を務めている。図書館の多様性委員会では、2008年から2009年に議長を務めた<sup>61）</sup>。また、委員会ではないが、北キャンパス図書館などでコレクションを検討する打ち合わせがあるときには、これに加わることもある。更には、非公式であるが、キャンパス内の他の図書館を訪れて、コレクションの構築などについて提案をすることもある（C）。

③について、中央図書館もしくは北キャンパス図書館でのレファレンス業務の担当時間は他の図書館員と比べて少ない。多くの図書館員は週あたり8時間から12時間を担当しているが、フィールド・ライブラリアンは、通常は、月曜日の2時間と水曜日の2時間など週あたり4時間を担当している（C、D）。

フィールド・ライブラリアンの業務内容の最

大の特徴は、「⑤部局が決定した業務を遂行する」ことにある。⑤の具体的な内容や各業務のエフォートは担当する研究科によって異なる (A)。中央図書館の図書館員の平均的なエフォートは、学習支援と教育支援が約 40%、コレクションの構築が約 10% である。女性学研究科のフィールド・ライブラリアンは学習支援や教育支援に重点を置いているために、コレクションの構築に関するエフォートは約 20% で、それ以外を学習支援や教育支援にあてている (B, D)。古典学研究科のフィールド・ライブラリアンのエフォートは、約 70% がコレクションの構築、約 30% がレファレンス、学習支援や教育支援関係である<sup>55)</sup>。コレクションの構築については、大学院生用図書館、部局の図書室を含むミシガン大学内にある古典学に関するコレクションをすべて担当する (D)。芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンは、職員紹介のホームページで、⑤に該当する主な業務として、次のものをあげている<sup>64)</sup>。

- ・芸術家（学生や教員を含む芸術・デザイン研究科の関係者のこと）が図書館を効果的に利用する方法を指導する。
- ・学期中にクラス内で情報収集の支援を行う。
- ・教員と学生のために、個別に研究の相談を受ける。
- ・芸術・デザイン研究科のカリキュラムを向上させるために、北キャンパス図書館の資料を購入する。

2012 年の職務内容記述書では、コレクションの構築 (25%)、レファレンス業務 (20%)、リエゾン業務 (20%)、指導業務 (20%)、他の活動 (15%) と、業務内容とエフォートを提示している。このうち、リエゾン業務については、次の内容を明記している<sup>65)</sup>。

- ・芸術・デザイン研究科のオフィスで業務をし、図書館のコレクション、サービス、方針について常に教員や学生と検討する。
- ・利用者への図書館の対応を向上させたり新しいサービスを始めたりするために、芸

術・デザイン研究科の関係者と綿密に連絡を取り合う。

- ・芸術・デザイン研究科の会議や話し合いに参加する。

①から⑤の業務に加えて、フィールド・ライブラリアンには、中央図書館を含む図書館が利用者に対してできることについて、研究科の教員や学生に伝えることが期待されている。その一方で、研究科で得た図書館に関するニーズ等について、中央図書館の関係者と共有することが期待されている (B)。

フィールド・ライブラリアンによる支援の主な対象は担当する研究科の教員と学生であるが、その重点は研究科によって異なる。女性学研究科では 3, 4 年次の学士課程の学生を主な対象とし (B)、芸術・デザイン研究科では教員と学士課程の学生 (C)、古典学研究科では教員と大学院生を主な対象としている (D)。

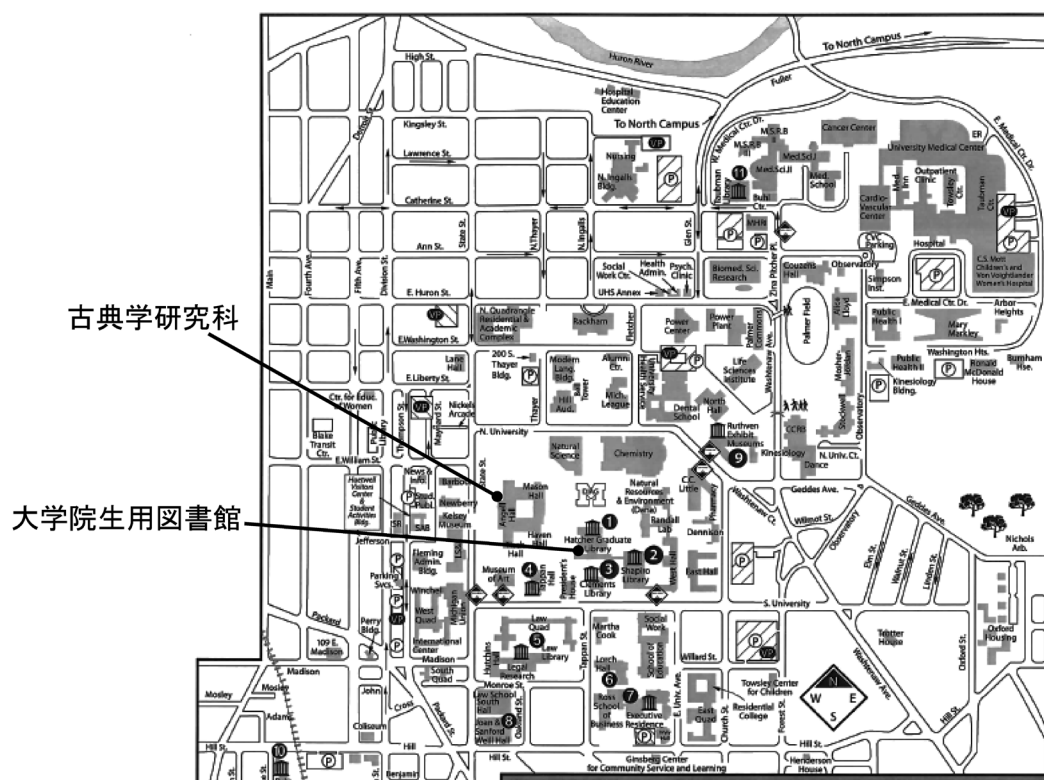
勤務時間は、他の図書館員と同様に、平日の 9:00 から 17:00 までの週 40 時間である (C)。他の図書館員と比べて、超過勤務になることも多い。その理由は、研究科が主催するイベントが週末や夕方にあることによる。平日の出勤時間を遅くするなどの調整をしてはいるが、週あたり 60 時間や 80 時間の勤務時間になることもある (D)。

## E. 地位

フィールド・ライブラリアンは年俸制の図書館員である。1 年ごとに契約を更新するが、簡単な書類上の手続きのみで更新される (D)。他の図書館員と同様に、フィールド・ライブラリアンもファカルティの地位を持つ。だが、終身在職権 (tenure) を得るなどのシステムは適用されない (C)。

芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンは、着任時から特任教員 (adjunct faculty member) の地位を持つが、教育担当の義務はなく、何らかの特典をもつわけではない。研究科長の意向によって、この地位を持つこととなった (C)。

ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ： フィールド・ライブラリアンの活動を中心に



第3図 中央キャンパスのマップ

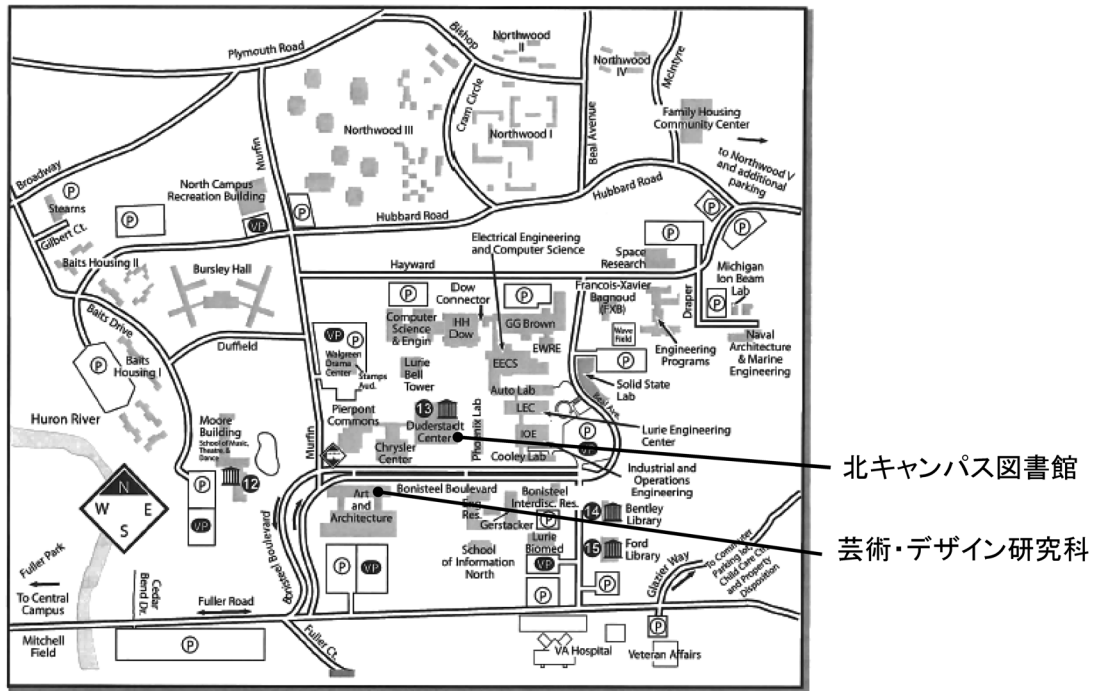
## F. オフィス

フィールド・ライブラリアンは、中央図書館にもオフィスを持つが、担当する研究科のオフィスや研究科の建物内で1日の大半を過ごす(D)。レファレンス業務を担当したり、図書館が主催する委員会に出席したりするときに、中央図書館もしくは北キャンパス図書館を訪れている(第3、4図)。

女性学研究科を担当するフィールド・ライブラリアンのオフィス空間は、研究科の建物の入口付近にある事務室の一角にある。専用のデスクはあるが、個人用に区切られたオフィスではない<sup>66)</sup>。

芸術・デザイン研究科を担当するフィールド・ライブラリアンのオフィスは、研究科の建物の2階にあり、学習支援サービス関係のオフィス群の一角に位置する<sup>67)</sup>。周囲には、大学院生のアドバイザー、国際研究に関するアドバイザーほか複

数のスタッフのオフィスがある(第5図)。教室側の廊下に面した壁にドアがなく、奥まった印象を与える。利用者のアクセスを向上させるために、他のオフィスに移動することや、廊下側の壁にドアをつけることを研究科長と相談しているが、予算がないために実現していない。在室中には入口のドアを開けておいたり、ドアに「芸術・デザイン担当の図書館員です。ドアが開いていなければ、ノックして下さい。」というサインを出したり、学習支援のときにオフィスを紹介したりするなど、利用者が訪問しやすいような工夫をしている。また、教室側の廊下に面した壁の一角に固定窓があるために、廊下からオフィス内の様子が見えるようになっている。廊下側の窓から誰かが話をしたい様子が見えたら、スタッフ専用の通用口のドアを開けて招き入れている。通用口のドアは、他のスタッフの希望により通常は施錠され



第4図 北キャンパスのマップ

ているために、外から開けることはできないが、内側からは開けることができる。これに加えて、オフィス群の入口付近に研究科の職員が常駐しているために、フィールド・ライブラリアンとの面談の希望者については、この職員が案内をしている。現在では、芸術・デザイン研究科の建物内に図書館はないために、北キャンパス図書館が主に利用する図書館になる(C)。

古典学研究科を担当するフィールド・ライブラリアンのオフィスは、最初は研究科の建物の端に位置していた。だが、その重要性が認められるようになり、研究科の事務室の前という中心的な位置に移動した。新しいオフィスとなった部屋は、それまでコンピュータ演習室として使用されていた。フィールド・ライブラリアンの移動にともなって、この演習室を2つに分割し、奥の部屋をフィールド・ライブラリアンのオフィスに、前室をコンピュータを利用できる小規模のコンピュータ・ラボとした。新しくなったコンピュータ・ラ

ボでは、多くの学生が電子メールを確認したり、データベースの結果を印刷したりしている。近年は、多くの学生がラップトップ型のコンピュータを持ち歩いているために、コンピュータ・ラボには、2, 3台のコンピュータのみを設置している。コンピュータ・ラボの前には、廊下を挟んで研究科の事務室があり、その周囲に研究科の図書館、手洗い等がある。新しいオフィスへの移動によって、部局の関係者の主要な動線上に位置づけられたとすることができる(D)。

中央図書館のフィールド・ライブラリアンのオフィスには、専用のデスクがあるが、どのフィールド・ライブラリアンもほとんど利用していない(C, D)。着任直後には、女性学研究科のフィールド・ライブラリアンと古典学研究科のフィールド・ライブラリアンがひとつのオフィスを共有していた。だが、学生や教員が訪問するために互いのプライバシーを確保できる空間が必要になると考え、1年後には、古典学研究科のフィールド・



ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ：フィールド・ライブラリアンの活動を中心に



第5図 芸術・デザイン研究科のフロア・マップ (2階)

ライブラリアン専用のオフィスにした。女性学研究科のフィールド・ライブラリアンは他の場所に新しいオフィスを得た。女性学研究科のフィールド・ライブラリアンの転出後には、そのオフィスを古典学研究科のフィールド・ライブラリアンが使用していたが、新任の図書館員が使用することになったために、地下のオフィスに移動した。だが、このオフィスも他の図書館員が使用することになったために、他の場所に移動した。このオフィスは他の図書館員や利用者から離れた場所に位置するために利用することはほとんどないが、万一の必要に備えて場所を確保し、ミーティング等のために使用している (D)。芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンは、中央図書館のオフィスを利用したことがない。中央図書館を訪れるときにも、委員会等には出席するだけで、そのオフィスに立ち寄ることはない (C)。

## G. 他の図書館員との交流

フィールド・ライブラリアンは、多くの時間を

担当する研究科で過ごすために、中央図書館内の動向についての情報を得にくいという問題をもつ。そのために、中央図書館を頻繁に訪れて他の図書館員との交流を図り、情報を得るように努めている。

芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンは、着任当初は、一日に1回は中央図書館に立ち寄って他の図書館員と話をしたり、中央図書館の特別委員会や委員会に可能な限り出席したりするようにしていた<sup>23)</sup>。近年では、毎日訪問することはないが、会議等のために、少なくとも1週間に一度は訪問している。図書館内には小規模のワーキング・グループが多数あるために、それにも参加をしながら交流を図っている。芸術・デザイン研究科は中央キャンパスから自動車で約10分の距離にある北キャンパスに位置する。北キャンパスと中央キャンパスのあいだには無料のバスが運行されているが、混みあうために、フィールド・ライブラリアンは自動車で移動をしている。芸術・デザイン研究科のフィールド・ラ



イブラリアンは北キャンパス図書館で週あたり4時間のレファレンス業務を担当したりレファレンス会議に出席したりするために、北キャンパス図書館の図書館員とは、交流の機会を多く持つ。中央キャンパスの図書館員には、中央図書館で開催されるキャンパス全体のレファレンス会議や月例のコレクション構築の会議、その他の会議や集会で顔を合わせる。また、外部の図書館専門職団体の委員会でも顔を合わせる（ミシガン大学の）図書館員もいる。公式・非公式の交流の中で、フィールド・ライブラリアンの活動を他の図書館員に伝えることはほとんどない。その理由は、他の図書館員がフィールド・ライブラリアンとして活動する可能性はほとんどないからである（C）。

古典学研究科のフィールド・ライブラリアンは、中央図書館の図書館員との交流を深めるために、着任当初は、毎日異なる図書館員と昼食をとり、図書館や学内の情報を得るよう努めていた。近年、その機会は週に1回程度に減っている。その理由は、予算の削減にともなう職員数の減少により、図書館員が忙しくなり、各人のオフィスで持参の昼食を取ることが多くなったからである。だが、中央図書館には毎日のように足を運んでいるために、機会があるごとに、他の図書館員のオフィスに立ち寄り、大学や図書館に関する情報共有をしている。2012年に研究支援課の課長の役割も担うようになってからは、図書館の管理職の関係者と昼食を一緒にとりながら、管理業務に関するアドバイスを受けることもある（D）。

フィールド・ライブラリアン同士の打ち合わせについて、着任直後は、頻繁に実施していた。その理由は、フィールド・ライブラリアンの事業が新しい試みであったために、助け合う必要があると考えていたことにある。打ち合わせの主な内容は、マーケティング、コミュニケーションの方法に加えて、図書館関係の業務や情緒面に関する問題である。また、誰かに問題が生じた時には、その問題を一緒に検討した。他に同様の役割を持つ図書館員がいなかったために、この打ち合わせは

セラピーの役割も果たしていた。3名のフィールド・ライブラリアンで輪読会をすることはなかったが、芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンが、エンベディッド・ライブラリアンやフィールド・ライブラリアンに関する文献をよく読んでいたために、昼食を一緒に取りながらその内容を共有した。他のフィールド・ライブラリアンがここで得た知識を支援に反映させることもあった。2007年に女性学研究科のフィールド・ライブラリアンが転出した後には、活動に慣れてきたり、古典学研究科と芸術・デザイン研究科のキャンパスが離れたりしているために、打ち合わせをしなくなった（D）。

## H. フィールド・ライブラリアン事業の変化

第5回の調査を行なった2012年の時点で、芸術・デザイン研究科と古典学研究科には、2002年に着任したフィールド・ライブラリアンが引き続き務めている。だが、女性学研究科では、フィールド・ライブラリアンが転出したのを機に廃止となった。その一方で、映画芸術文化学部（Department of Screen Arts and Cultures）内にある映画学科（Films Studies）、健康科学図書館（Taubman Health Sciences Library）、建築学研究科（A. Alfred Taubman College of Architecture and Urban Planning）でフィールド・ライブラリアンに類する活動が見られるようになった。

女性学研究科に着任したフィールド・ライブラリアンは2007年11月に転出した。その後、図書館は女性学を担当する図書館員を雇用した。だが、フィールド・ライブラリアンではなく、中央図書館に勤務する女性学担当の図書館員としてであった。その理由は、女性学の研究領域が多分野に及ぶために、教員の研究室がキャンパス内に分散し、教員との密な連携を図るフィールド・ライブラリアンとしての役割を担うのは難しいと考えたからである。また、研究科内で、フィールド・ライブラリアンが、図書館員ではなく、秘書のように捉えられていたことがある。そのために、部局の教員と連携するというフィールド・ライブラ

リアンの活動を積極的に展開するのは難しかった(C, D)。本稿の女性学研究科に関する記述については、フィールド・ライブラリアンの在職時のものである。

映画学科には、寄付をもとに1999年に設置された学科の図書室(Donald Hall Collection)がある。設置時には、図書室を担当する1名の職員が雇用された。この図書室はミシガン大学の図書館組織には含まれず、学科が所有する私設図書室であるために、この職員は映画学科に所属するアシスタント・スタッフであった。だが、図書館の部長(フィールド・ライブラリアンの導入時の部長の後任)の意向により、2008年12月にフィールド・ライブラリアンの辞令を受け、中央図書館の所属となった。その理由は、この職員が、映画学科で教員と連携して科目関連指導を実施したり日常的に交流を深めたりするなど、すでにフィールド・ライブラリアンと同様の活動をしていたからである。辞令後には、古典学研究科のフィールド・ライブラリアンが、映画学科のフィールド・ライブラリアンに、図書を発注する方法、レファレンスの方法、指導サービスの方法などの手解きをした。その内容は、図書館に関する一般的な事項であり、フィールド・ライブラリアンに特化した事項ではない。映画学科のフィールド・ライブラリアンが学科内ですでにその役割を果たしていたために、フィールド・ライブラリアンに関する知見を共有する必要がなかった。現在は、映画学科で辞令前と同じ活動を続けながら、映画学科の図書室の蔵書を図書館のOPACに登録するなど、中央図書館との連携を図っている(D, I)。

健康科学図書館では、現在の分館長の提案により、2006年にリエゾン・プログラムを導入した。健康科学図書館の図書館員は、分館長と副分館長を含めて18名で、そのうち副分館長を含む16名がリエゾン業務を担う。その目的は、図書館のレファレンス・デスクを担当していた従来の図書館員(reference librarian)を、研究科や病院に埋め込んだ(embedded)リエゾン・ライブラリアンに移行させることにある<sup>68)</sup>。健康科学図書館の図書館員は、フィールド・ライブラリアンの肩

書きをもたないが、教員と連携して科目関連指導を実施したり、健康科学研究科の教員会議に列席して研究科内の情報を得たり、教員の研究を支援したりするなど、フィールド・ライブラリアンと同様の活動を展開している(J, K)。よりよいリエゾン業務を実現するために、健康科学図書館の図書館員が、芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンから、聞き取りによって非伝統的な図書館員の役割や戦略についての知見を得たこともある<sup>69)</sup>。

建築学を担当する図書館員は北キャンパス図書館にオフィスを持つ。通常は、北キャンパス図書館で、週あたり4, 5時間のレファレンス・デスクと1時間のチャット・レファレンスを担当している。これに加えて、2008年の秋学期より、建築学研究科の建物内でアウトリーチ・レファレンスを実施している。具体的には、研究科の廊下に備え付けられた休憩用のテーブルやベンチを活用して、学生や教員からの質問を受け付けている。受付を構えるのは、人通りが非常に多い場所で、周囲には、駐車場やアトリエに続く階段、文房具や飲み物、スナック類を販売する小店、作業室や実験室、手洗いなどがある。最大で10名が利用できるテーブルは、他の学生も昼食や休憩等で利用する。図書館員は、テーブルの一角に案内用のポスター(約20×28cm)を立て、ラップトップ型のコンピュータを持ち込んで対応する。このポスターと同じものを研究科内の掲示板等に貼ってサービスの案内をしている。ポスターには、図書館員の滞在時間についても記している。ミシガン大学では、情報学研究科(School of Information)と図書館の共同プロジェクトにより、情報学を専攻する学生が図書館の学生スタッフ(University Library Associate)として週あたり20時間の活動をしている。北キャンパス図書館で活動する1, 2名の学生スタッフが図書館員とともにアウトリーチ・レファレンスを担当することもある。滞在時間は、学生スタッフがいる時には週あたり6～8時間、図書館員だけの時には4時間としている。2013年の冬学期には、学生スタッフがいなかったために、月曜の11:00か

ら 13:00 と水曜の 14:00 から 16:00 を滞在時間としている。滞在する時間帯については試行錯誤中で、多様な時間を設定しながら利用者が利用しやすい時間帯を検討している。現時点では、最も利用が多い昼食の時間帯も含めている。質問については、1 学期あたり 60 から 100 を受け付ける。その多くは学生からの質問である。質問の数は日によって異なる。学期半ばのある午後には 1 件の質問に対応しただけだったが、その 1 週間後には、5 件の長い質問と 3 件の短い質問、2 件の教員との会話があった。質問の内容は多岐にわたるが、特定の情報資源の探索に関する質問よりも、どのように問いを設定するのかという質問の方が多い。そのために、対応時には、学生と一緒に適切な検索式を検討している。質問だけではなく、通りがかりに声をかけてきたり話をしてきたりする関係者も少なくない。会話をすることも、交流を深めるために重要になると考えている<sup>70)</sup>。建築学研究科の関係者は、このアウトリーチ・レファレンスを快く受け入れ、活用している。だが、この図書館員のオフィスを用意する予算を持たないために、正式なフィールド・ライブラリアンとして採用することができないでいる (C)。

## V. 研究科におけるニーズの把握

### A. 女性学研究科におけるニーズの把握

女性学研究科には、75 名の教員、5 名の職員<sup>71)</sup>、75 名の学士課程の学生<sup>72)</sup>、6 名の大学院生課程の学生<sup>73)</sup>がいる。女性学研究科のフィールド・ライブラリアンは、着任時に、研究科の多くの教員と個別に面談をした。個別に面談をした理由は、女性学は学際的な分野であり、教員の専門分野が多岐にわたるために、複数の教員が一堂に会して共通の事項について話し合うのは難しいと考えたからである。この面談で教員にたずねたのは教員の研究内容についてのみである。教員が研究活動の中で図書館を利用していることが明らかになった場合に、図書館が好きであるかどうか、図書館についてどのように考えているのかなどをたずねた (B)。

この最初の面談では、図書館が提供するサービ

スについては言及しなかった。この面談の後に、研究科のすべての教員と大学院生に、中央図書館で利用できる情報資源、サービス、学習支援や教育支援に関する情報、図書館関係の新しい事項について電子メールで案内をした。最初の面談で図書館サービスについて言及しない理由は、この面談の主な目的が、教員が持つ図書館に関するニーズを把握すること、教員と顔見知りになることであるからである。図書館が提供するサービスを教員が受け入れるためには、教員との個人的な関係を構築することが先決だと考えて、この時点では図書館の案内を控えている (B)。

着任時には、上記のような個々の面談によって、研究科内のニーズを計画的に把握しようと努めていた。だが、時間が経つと、個々の教員と知り合いになることができたために、面談を計画する必要がなくなった。いずれの場合でも、明らかになった教員のニーズをもとに、教員が研究するテーマをコレクションの構築に反映させたり、そのテーマを用いて科目関連指導を設計したりしている (B)。

### B. 芸術・デザイン研究科におけるニーズの把握

芸術・デザイン研究科には、約 500 名の学士課程の学生、30 名の大学院課程の学生が所属する。学生の 40% はミシガン州の出身である。専任教員は 30 名、専門職員および技術職員は約 40 名いる<sup>74)</sup>。芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンは、着任前に、研究科長や副研究科長と面談をした。面談の目的は、具体的な計画について検討したり特定のリクエストを受け付けたりするのではなく、顔見知りになることであった。ここでは、研究科長が「研究科に図書館[関係者]が来てくれて嬉しい」と繰り返し伝えていた (C)。

フィールド・ライブラリアンは、研究科の教員について理解を深めるために、着任後すぐに、電子メールで予約を取って個別に面談をした。面談では、教員の研究や関心事についてたずねた。この時点で面談をしたのは、すべての教員ではな

く、返信のあった教員のみである。この面談で印象に残っているのは、具体的なニーズではなく、「図書館〔関係者〕が研究科に戻ってきた」という教員たちの前向きな反応であった。その理由は、以前には、芸術・デザイン研究科の建物内に図書館があり、そこに図書館員が常駐していたが、メディア・ユニオンが設置されるときに統合されていたために、研究科の関係者が図書館に対して何らかの喪失感があったと考えられる。教員は図書館をよく利用するために、最初の面談をしたときに、フィールド・ライブラリアンは教員から歓迎されているという印象を強く受けた(C)<sup>54)</sup>。

その後も、機会を見つけて教員に図書館利用について質問をしている。主な質問として、教員たちが関心を持っていることは何か、教員たちが図書館の何を利用しているのか、図書館を利用しない場合にはどこで情報を入手するのか、コレクションの強みと弱みは何だと考えるのか、学生に図書館を利用するように伝えているのか、学生にフィールド・ライブラリアンの支援を受けられることを伝えているのか、教員は学習支援に関心を持っているかなどがある。他に、研究科が所蔵している画像コレクションを利用したり関心を持ったりしているかどうか、また、それ以前の問題として、その存在を知っているかどうかなどがある。このように質問をすること自体が、図書館のサービスやコレクションについて詳しくない教員にその存在を印象づけるよい機会になると考えている(C)。

2012年に着任した新しい研究科長は、他大学(芸術関係の大学の研究科長)からの着任であったために、フィールド・ライブラリアンの存在を知らなかった。だが、学者肌であったために、学術研究やこれに図書館がどのように役立つのかについて関心を持っていた。そのために、着任後には、フィールド・ライブラリアンや図書館の有用性を理解し、前任の研究科長と変わらない支援を続けている(C)。

## C. 古典学研究科におけるニーズの把握

古典学研究科には、30名の教員、6名の職員、27名の大学院生がいる<sup>75)</sup>。古典学研究科のフィールド・ライブラリアンは、着任時に、研究科の全教員とグループ面談をした。この面談では、教員を昼食に誘い、気軽な会話をとおして教員が図書館員や図書館に期待していることを聞き出した。昼食代については、中央図書館から支給されているクレジットカードで支払った(D)。

この昼食会の目的は、フィールド・ライブラリアンである自分を紹介することと、支援の対象者である教員と気の置けない関係を構築することである。1回あたり2、3名の教員と面談をした。フィールド・ライブラリアンと研究科の教員は、一緒に昼食をとりながら、図書館に関する学生や教員自身のニーズ、図書館に対する教員の考えについて話をした。教員の主なニーズは、コレクションの充実で、不足しているコレクションや重視する分野のコレクションに関するものだった。この中で、フィールド・ライブラリアンは学習支援を含む図書館のサービスについて伝えている。週あたり2、3回の昼食会を実施し、数週間をかけて研究科のすべての教員と面談をした(D)。

この昼食会を実施した後に、個々の教員の研究室で個別の面談をした。この時点では、多くの教員が、図書館に対する考え、不満、提案、そして図書館に期待することについて述べようとした。教員の中には、自分が担当する授業について話をしたがる教員がいる。絶対数は多くないが、フィールド・ライブラリアンが授業をどのように支援できるのかについてたずねる教員もいる(D)。

教員との面談から、新しいアイデアを得たということはなかったが、新しい環境で何をしたらよいのかという見通しを得ることができた。事前に教員の履歴書に目を通していたが、教員が実際に研究したり教育したりしている内容、今後の研究の方向性、教えたいと思う新しい授業科目などの情報を十分には得られなかった。古典学の分野ではコレクションの構築が重要になるために、これらの情報はコレクションの構築に必要だと考え



ていた。この面談で教員の研究内容や教育内容に関する詳しい情報を得たために、これをコレクションの構築に反映させることができた (D)。

学生のニーズについては、日常の交流の中で把握することが多い。だが、面談を意図的に計画することもある。6～10名の大学院生を自分のオフィスに招いてピザをふるまい、その中で、自己紹介をしたり、大学院生が取り組む研究テーマ、図書館に関するニーズを明らかにしたりしたこともある。その結果、大学院生が取り組んでいる研究テーマをコレクションの構築に反映させたり、学習支援を受けたことがない学生がいることがわかったときには、そのような学生を対象とする情報探索に関する指導を提供したりした。面談の中では、図書館に関する学生の不満も明らかになった。具体的には、相互貸借に申し込んだ文献の到着が遅いこと、コレクションが不十分であること、購入された文献の登録の手続きに長い時間がかかることなどがある (D)。

## VI. 学生に対する学習活動の支援

### A. 科目関連の情報利用指導

#### 1. 女性学研究科における科目関連指導

女性学研究科を担当するフィールド・ライブラリアンは、各学期が始まる前に、部局の全教員に科目関連指導の案内を電子メールで送付する。送付してすぐに依頼をする教員もいれば、学生の情報利用行動を確認した後や、授業の開始後や学期の途中になってから依頼をする教員もいる。フィールド・ライブラリアンは、どのような場合にも依頼を受け付け、「明日をお願いします」という急な依頼にも可能な限り対応するようにしている。科目関連指導のために授業の時間を割けないと考える教員には、シラバスにフィールド・ライブラリアンの名前と連絡先を記すことを提案している (B)。

教員は、電子メールで案内を受けたときに学習支援を依頼しようと考えても、返信を忘れることが多い。研究科の建物内でフィールド・ライブラリアンを見かけたときに、返信を忘れていたことに気づき、その場で依頼をする教員もいる。電子

メールや電話ではなく、フィールド・ライブラリアンのオフィスに立ち寄って依頼をする教員もいる (B)。

科目関連指導で扱うテーマは、各授業科目の課題に関するテーマである。課題のテーマについては、教員から事前に連絡を受ける。授業科目や課題の内容の不明な点については、教員にたずねるだけでなく、フィールド・ライブラリアンが聴講している授業科目の読書課題を読んだり、学生と話をしたりして理解を深める。教員が、これまでの経験をもとに、学生が設定するテーマの例をフィールド・ライブラリアンに事前に伝えることもある。これをもとに、どのようなデータベースを用いるのか、どのような検索式を用いるのか等を検討しながら、課題のテーマに関する情報検索の演習を計画する。これによって、学生が、特定のテーマについて、複数の情報資源から情報を得られることを理解できるようになると考えている (B)。

科目関連指導の実施日について、着任当初には、教員が指定した第1回の授業日に設定することが多かった。だが、フィールド・ライブラリアンとしての経験を重ねるうちに、第1回に科目関連指導を実施しても学生は関心を示さないこと、学生が情報探索法について学習するのに最良の時期があることが明らかになった。そのために、可能な限り、学生が取り組むテーマを設定した時に科目関連指導を実施するようにしている。科目関連指導の後には、依頼に応じて個別の支援をしている。通常は1, 2名の学生から質問を受ける (B)。

教員との日常的な交流の中で、科目関連指導の内容や方法を見直すためのアイデアを得ることもある。教員は、毎年、同じテーマの課題を与えることが多いために、学生がテーマをうまく設定できなかったり、基本的なデータベースをどの程度知らなかったりするのかを把握している。会話をとおして、その現状を知ることもある。また、科目関連指導を実施する時期について、教員が前年度に設定した時期が遅すぎたと考えている時には、翌年度に早めの時期を設定するようにしてい



ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ：フィールド・ライブラリアンの活動を中心に

る。主な交流の場所として、研究科の建物内の廊下、教員のオフィス、フィールド・ライブラリアンのオフィスがある (B)。

## 2. 芸術・デザイン研究科における科目関連指導

芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンは、各学期が始まる前に、研究科の全教員に電子メールで科目関連指導の案内をしている。実施を希望する日の1か月前に依頼をする教員もいれば、1日前に依頼をする教員もいる。どのような場合にも、依頼を断らないようにしている (C)。ある教員は、フィールド・ライブラリアンの着任前にも他の図書館員が科目関連指導を実施していたが、案内がなかったために科目関連指導を導入したことがなかった。だが、フィールド・ライブラリアンの着任後には、各学期の始めに案内があるために、導入するようになっている (F)。

フィールド・ライブラリアンは、教員から科目関連指導の依頼を受けると、課題のテーマについて理解を深めるために、シラバスを入手したり、電子メール等で詳細な点について教員にたずねたりしている。また、打ち合わせを重ねて、教員が希望する内容を確認したり、学生が取り組む課題やプロジェクトについての理解を深めたりしている。これをもとに、説明する内容や情報源を検討したり、その授業科目の情報探索のガイド (Research Guide)<sup>76)</sup>を作成したりする。打ち合わせの時に、教員が希望すれば、学習管理システムである C-Tool の操作について説明をすることもある (C)。

教室については、事前に受講生の数を確認して、北キャンパス図書館のデジタル・センター内にあるコンピュータ演習室を予約している。近年では、すべての学生がラップトップ型のコンピュータを持つことになっているために、研究科の教室で、学生とフィールド・ライブラリアンがそれぞれのラップトップを用いて科目関連指導を実施している。そのために、コンピュータ演習室を頻繁に利用することはなくなった (C)。

科目関連指導を実施する時期は、学生が実際に

課題や研究に取り組み始めたときである。この時が科目関連指導を実施するのに適した時期だと考えている。だが、教員がすでに授業計画の中で設定していることもある。その時には、教員の計画に従っている。科目関連指導の当日には、コンピュータ演習室や教室で説明と演習をした後に、芸術・デザイン関係のコレクションがある北キャンパス図書館のツアーをする。ツアーの中で、研究科の建物内にあるフィールド・ライブラリアンのオフィスについても紹介している (C)。

学生の基礎的な課題探求能力の育成を目指す授業科目にも、科目関連指導を導入している。「概念、枠組み、文脈 (Concept, Form & Context) I, II」(各3単位, Iは秋学期, IIは冬学期の開講)は1, 2年次の必修科目である。学習の目的は、学生が、問題を発見したり、問題を解決したり、アイデアを展開させたりできるようになることである。1クラスは20名編成で、1学年あたり5クラスある。学生は2年間、合計4学期にわたって受講し、研究科のすべての教員が講師を務める<sup>77)</sup>。フィールド・ライブラリアンは、担当教員から依頼があったクラスで科目関連指導を実施している。実施の手順等は他の科目関連指導と同様である。この授業科目が、学生へのフィールド・ライブラリアンの紹介の場にもなっている (F)。

フィールド・ライブラリアンは、「ゲスト・スピーカー・シリーズ (Penny W. Stamps Speaker's Series)」(初年次必修, 1単位)も支援している。この授業では、週毎に大学外から異なるゲスト・スピーカーを招聘する。フィールド・ライブラリアンの着任前後に始まった授業科目で、フィールド・ライブラリアンは、ゲスト・スピーカーの背景となる情報を効率よく入手できるようにするために、各週のゲスト・スピーカーがこれまでに発表した文献等の書誌情報を「主要な著書 (Selected Bibliography)」として学生や教員に電子メールや学習管理システムで事前に連絡している。この情報はゲスト・スピーカーを紹介する研究科のウェブサイトからも利用できるようにしている<sup>78)</sup>。2013年1月24日には、「履物の構造

第3表 古典学研究科「古典学研究の方法 (Greek/Latin 600)」の学習内容 (2005 年, 秋学期)

授業日	学習内容 I (1 時間目)	学習内容 II (2 時間目)	教室
9 月 12 日	アイス・ブレイキング, 人生と図書館, トーマス・マンの「図書館研究モデル」		Classics Conference Room
9 月 26 日	トーマス・マン (同上), ミシガン大学図書館の OPAC, その他の図書館カタログの利用法 I	現代ギリシャ研究 (A 教授, B 教授)	Classics Conference Room
9 月 30 日	パピルス古文書学 (C 教授)		Papyrology Library
10 月 3 日	ミシガン大学図書館の OPAC, その他の図書館カタログの利用法 II	歴史言語学 (D 教授)	中央図書館 319 教室
10 月 24 日	L 'Annee Philologique 他の書誌ツール I	ポライトネス理論 (E 教授)	中央図書館 319 教室
10 月 31 日	L 'Annee Philologique 他の書誌ツール II	人口統計学 (F 教授)	中央図書館 319 教室
11 月 7 日	テキストの批評 (G 教授)		Classics Conference Room
11 月 14 日	印刷版の参考図書 I	ソクラテス研究の歴史 (H 教授)	Classics Conference Room
11 月 28 日	古典学研究の歴史 (G 教授)		Classics Conference Room
12 月 5 日	印刷版の参考図書 II	ギリシャの写本 (I 教授)	中央図書館 806 教室

下線 = フィールド・ライブラリアンの担当部分

(The Architecture of Footwear)」というテーマで, NIKI のデザイナーである Wilson W.Smith III を招聘している。「主要な著書」では, Smith 氏に関する新聞記事や雑誌記事, Web 上に掲載された活動報告を紹介している。雑誌記事については, ミシガン大学図書館のページを参照できるようにしている<sup>79)</sup>。この授業科目の課題は, ゲスト・スピーカーの中からひとりを選んで, レポートを作成することである。学生はその過程で「主要な著書」を活用することができる。ゲスト・スピーカーの情報については, 研究科の事務室のスタッフがフィールド・ライブラリアンにリストを送付している (C)。

### 3. 古典学研究科における科目関連指導

古典学研究科のフィールド・ライブラリアンは, 古典学研究科とドイツ語学科の授業科目で, 科目関連指導を実施している。

古典学科の学士課程の授業科目の多くは, 語学の学習であったり教科書中心の授業方法であったりするために, 多様な資料を利用しないと考

え, 科目関連指導の対象としていない。だが, 語学関係の授業科目でも上級科目になるとレポート課題を与えることもあるために, 上級科目の担当教員には科目関連指導を案内している。だが, 教員の多くは科目関連指導を重要とは考えていない。少数の教員が, 授業でフィールド・ライブラリアンの存在と役割を伝え, それを聞いた学生が個別に電子メールで質問をしたり支援を要請したりする程度である。担当する授業科目の学習管理システムのコースに図書館の学習プログラムを加える教員もいるが, これも 1 名のみである。科目関連指導の主な対象となるのは大学院課程の授業科目である。2012 年の秋学期には, 古典学研究科の 3 科目, ドイツ語学科の 1 科目で科目関連指導を実施している。古典学研究科で実施している授業科目は, 大学院課程の科目である「古典考古学のプロゼミナール (Proseminar in Classical Archaeology)」(CLAECH 600) と「古典学研究の方法 (Methods of Classical Scholarship)」(LATIN 600/GREEK 600), 学士課程の優等学位プログラム科目である「古典学研究演習

(Classical Studies Honors Seminar)」(CLCIV 494)である。ドイツ語学科で実施しているのは、学士課程の優等学位プログラム科目である「ドイツ語のプロゼミナール (German Honors Proseminar)」(GERMAN 491)である。これらの授業科目では、学生は研究方法について学んだり研究課題に取り組んだりする<sup>80)</sup>。ドイツ語学科では、通常は、3, 4科目で実施しているが、科目関連指導を採用している教員が研究休暇中であるために、この学期には実施していない(D)。

古典学科でもドイツ語学科でも、優等学位プログラムに科目関連指導を導入した理由はいずれも論文の作成を課していることにある。ドイツ語学科では、優等学位プログラムを受けるのは約20名の学生(全体の10%)である(D)。このプログラムの趣旨は、学生が批判的な読解力を向上させたりドイツ研究に関する多様な文献に精通したりすることである<sup>80)</sup>。科目関連指導の導入を提案したのは、フィールド・ライブラリアンである。ドイツ語学科のカリキュラム委員会が優等学位プログラムの学生が提出した卒業論文について検討をしていたときに、フィールド・ライブラリアンが図書館による学習支援の実施を提案した。この提案をもとに、委員会は優等学位プログラムへの学習支援の組み入れについて検討を重ね、科目関連指導の導入を決定した。科目関連指導の方法については、他の授業科目と同様である。実施時間は年によって異なる。3時間の場合が多いが、2時間から4時間の間で設定する。古典学科でも、新設した学士課程の優等学位プログラムで3時間の科目関連指導を実施している。古典学科の優等学位プログラムでは、その新設時に科目関連指導を導入した。教員会議で前期の中期計画について検討していたときに、優等学位プログラムを設置することが提案された。その時に、フィールド・ライブラリアンが科目関連指導の導入を提案した。フィールド・ライブラリアンがすでに他の授業科目で指導の実績を持っていたり、学士課程の学生であっても大学院生のように研究論文を作成するときには図書館に関する指導の必要性が

あると伝えたりしたことによって、科目関連指導が正式に導入された。フィールド・ライブラリアンは、ドイツ語学科の優等学位プログラムで科目関連指導をすでに実施しており、効果があると判断していたために、古典学科でも導入する価値があることを伝えようと考えていた。中期計画について検討していた教員会議が、それを伝えるよい機会となった(D)。

教員から科目関連指導の依頼を受けたら、通常は、科目関連指導の内容や方法、必要になる時間と対応できるトピックの範囲を教員に伝えている。科目関連指導を希望する教員には、シラバスと課題を送付するように依頼している。これをもとに科目関連指導を設計し、その内容や方法を教員に確認する。多くの場合は、この時点で準備を完了することになるが、ここでトピックを追加したり特定のデータベースの利用法を組み入れることを希望したりする教員もいる。通常は、1つの授業科目の準備に必要な時間は1時間から3時間までの間である。準備する内容には、配布資料の作成、データベースの動作の確認、検索式の例題の作成、予行練習が含まれる(D)。

科目関連指導を実施する時期は学期始めではない。学生が研究論文を書き始める時期、最初の研究論文が課される1か月か数週間前に実施するようにしている。学期始めは学生が授業科目自体に慣れておらず、この時点で説明されたことを研究論文の作成時まで覚えていないからである。11月に研究論文を書き始めるのに、9月に科目関連指導をしたら、2か月の空白期間ができ、その間に学生は学習したことを忘れてしまう。これを懸念して、フィールド・ライブラリアンは研究論文が課される少し前に実施するように事前に教員に提案をしている。ある授業科目では、9月に図書館の基本的な利用など導入的な内容について説明し、11月に研究に焦点をあてた指導をしている。だが、教員が科目関連指導に多くの時間を割り当てたくなかったり、教員の出張日に科目関連指導を設定したりするなど、教員側の都合によって、研究論文を書き始める時期に科目関連指導を実施できないこともある。学期始めだけに機会を持つ

場合には、フィールド・ライブラリアンの役割やオフィスの位置を伝えるようにしている。これによって、学生が必要とするときにフィールド・ライブラリアンにたずねることができると考えている (D)。

科目関連指導では、中央図書館が予め作成しているデータベースの利用案内と自らが作成した特定のテーマに関するデータベースのリストを配布している。学生が取り組むテーマの多様性を考慮して、多様なテーマのリストを用意し、必要に応じて学生に配布している (D)。フィールド・ライブラリアンが作成した「ドイツ語のプロゼミナール」(2007年版)のためのリストには、テーマに関する専門分野を担当する4名の図書館員の氏名と電子メールのアドレス、図書館員が担当する分野(アメリカ研究、国際ビジネス、音楽と劇場、芸術)、「Anthropology Plus」,「Linguistics Abstracts Online」,「Music Index Online」を含む18のデータベースと各データベースの収録データ、データベースへのアクセス方法を示している<sup>81)</sup>。

科目関連指導の実施日には、教員にも参加するように呼び掛けている。その理由は、情報検索について教員も新しく学ぶことがあるからである。また、教員がいることによって、学生がより真剣に学習し、セッション中に学生、教員、図書館員の3者でディスカッションをすることができるからである。これによって、学生と教員と図書館員がともに図書館の利用について理解を深めることができると考えている (D)。

科目関連指導を実施する場所は、中央図書館にある図書館利用教育のための演習室である。この演習室を利用する理由は、科目関連指導に必要な設備や環境が整備されているからである。この演習室を利用できないときには、古典学研究科の建物内にあるコンピュータ演習室を使用している (D)。

科目関連指導の評価について、学生への事後アンケートは実施していない。科目関連指導の後に、担当教員と面談をして、上手くいった点、上手くいかなかった点、翌年に工夫した方が良い点

などをたずねている。これまでに改善した点として、教員が実習型の科目関連指導を希望したために、翌年から、コンピュータ演習室にあったラップトップ型のコンピュータを学生に配布して実習を加えたことがある。また、教員の希望により、引用を管理するソフトウェアを紹介したこともある。教員に加えて、学生からもフィードバックを得ている。科目関連指導の後に、オフィスを訪ねてきたり、個人面談を予約したり、電子メールで質問をしてきたりする学生がいる。学生による利用があることは図書館を価値のあるものと認識したことだと評価している。また、ここでの学生とのやりとりの中で明らかになった学生のニーズ等を翌年の科目関連指導に反映させることもある (D)。

教員は、一度でも科目関連指導を導入すると、その後は依頼をしてくるようになるために、翌年からは事前に電子メールで案内をしない。研究科の建物内で会ったときに、実施の確認をする程度である。同じ授業科目で実施するときには、前述の学生や教員からのフィードバックをもとに、内容や方法を見直す。同じ授業科目で何年にもわたって科目関連指導を実施することが多いために、内容や方法について通常は多くの変更はないが、授業科目の内容が変わったり、新しいテクノロジーが出てきたり、図書館内で新しい方針を策定したりした場合には、フィールド・ライブラリアンの方で多少の変更を加えている (D)。

## B. 独立科目での指導

フィールド・ライブラリアンが講師となって授業科目を担当することもある。

古典学研究科では、フィールド・ライブラリアンが責任者を務める1単位の授業科目として、2003年に「古典学研究の方法 (Methods of Classical Research)」(GREEK 600/LATIN 600)を設置した<sup>82)</sup>。受講対象は大学院課程の新入生(1学年あたり10名)である。この授業科目を設置した理由は、フィールド・ライブラリアンが古典学や考古学の研究に必要な二次資料について学生に指導することを、多くの教員が望んだか



ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ：フィールド・ライブラリアンの活動を中心に

らである。研究科の教員会議で議長がフィールド・ライブラリアンによる担当を決定し、フィールド・ライブラリアンが授業を設計し、研究科の教員がゲスト講師となった (D)。

授業時間は毎週2時間である。1時間目にはフィールド・ライブラリアンが古典学や考古学に関する主要な参考図書、百科事典、データベースについて説明し、2時間目には教員が古典学や考古学について説明をする。1時間目を担当するのは毎週フィールド・ライブラリアンであるが、2時間目を担当する教員は異なる。2時間目の内容は、古文を用いたテキストの批判的な読み方、石碑の読み方、絵画や古代の陶器の解釈の仕方などである (第3表)<sup>83)</sup>。教員とフィールド・ライブラリアンのチーム・ティーチングによって、学生は古典学や考古学分野の知識と基本的な二次資料について学習する (D)。主なテキストとして設定しているのは、*Library Research Models: A Guide to Classification, Cataloging, and Computing*<sup>84)</sup>と*Classical Studies: A Guide to the Reference Literature*<sup>85)</sup>という、図書館を利用した研究方法に関する2冊の文献である。成績評価は、出席、授業への参加度、課題の達成度による<sup>82)</sup>。

古典学研究科のフィールド・ライブラリアンは、着任直後からこの授業科目を担当している。この授業科目は19世紀から存在していた。1970年代に、新しい世代といわれた当時の教員が図書館の利用法に詳しくなかったために廃止したが、フィールド・ライブラリアンの着任後に、研究科の教員がこの授業科目を再開できると考えた (D)。

再開後の数年間は、フィールド・ライブラリアンが責任者となって開講していたが、財政的な問題があったり、フィールド・ライブラリアンが授業科目の責任者を務めることは大学の授業担当 (teaching) の規定に即さないと後任の議長が指摘したりすることによって、フィールド・ライブラリアンが責任者 (講師) という立場から外れることになった。財政的な問題については、フィールド・ライブラリアンを授業科目の講師とするた

めには、古典学研究科がフィールド・ライブラリアンに学内謝金を支払わなくてはならない。研究科がこの謝金を支払えなくなったことがある。その後、「古典学研究の方法 (Methods of Classical Scholarship)」と名称を一部変更して研究科長が責任者を務め、フィールド・ライブラリアンは12週からなる授業計画の第1週に1回分 (2時間) の科目関連指導を担当することとなった。この変更についても、導入時と同様に、議長の一任による決定事項であり、教員会議での承認事項ではない (D)。

### C. レファレンス・サービス

#### 1. 女性学研究科におけるレファレンス・サービス

学生は複数の情報源から、フィールド・ライブラリアンの連絡先の情報を得ている。女性学研究科では、学期毎に教員に学習支援の案内をしているために、教員が学生にフィールド・ライブラリアンの連絡先を伝えることも多い。また、中央図書館でのフィールド・ライブラリアンの不在時には、学生は他の図書館員からフィールド・ライブラリアンの名刺を受け取っている。大学院生は、電子メールのグループを持つために、ここに投稿したフィールド・ライブラリアンのメッセージから連絡先の情報を得ることもある (B)。

フィールド・ライブラリアンは、中央図書館のレファレンス・デスクだけでなく、研究科の建物内のいたるところで、学生からの質問を受ける。女性学研究科では、大学院生よりも学士課程の学生が多く質問をする。教員のオフィス・アワーに研究室を訪れた学生が、その帰りにフィールド・ライブラリアンのオフィスを訪ねることもある。教員に相談した探究中のトピックについて、フィールド・ライブラリアンにもたずねるのである。フィールド・ライブラリアンは、オフィス・アワーを設定してはいないが、多くの時間を部局で過ごす。フィールド・ライブラリアンのオフィスに立ち寄って質問をする学生が多いが、予約を入れる学生もいる。研究科の建物内にあるラウンジで、フィールド・ライブラリアンを偶然に



見かけた学生が質問をしてくることもある。授業で出された課題に関する心配事やストレスについてフィールド・ライブラリアンに相談を持ちかける学生もいる (B)。

## 2. 芸術・デザイン研究科におけるレファレンス・サービス

芸術・デザイン研究科では、学生が支援を必要とするときに、個別に対応をしている。研究科の建物内を歩いているときにも、「質問があるのですが」、「この本を注文してもらえませんか」などとたずねられたりする。フィールド・ライブラリアンが連絡先の情報（電話番号と電子メールのアドレス）を学生に渡すこともある。連絡先については、科目関連指導の時に配布したり、学生用のメールボックスに入れたりしている。学生は面談の予約を入れることもあれば、予約をせずにオフィスに立ち寄ってたずねることもある (C)。

フィールド・ライブラリアンのオフィスやその付近にコレクションがないために、質問を受けたときには、まずは、信頼できる Web 上の情報源を使用して回答し、次に、北キャンパス図書館の印刷資料を調査する (C)。学生からの質問には、レフェラル・サービスで対応することも少なくない。ある大学院生がキットサンを材料にした紙をつくりたいと相談してきたときには、化学工学を担当する図書館員に協力を要請し、この化学物質を供給できる企業を捜しだした<sup>24)</sup>。研究科の建物内にオフィスを構えることで、北キャンパス図書館のレファレンス・デスクにいるときよりも多くの支援を提供できると考えている<sup>23)</sup>。

芸術・デザイン研究科では、オフィスを訪れるのは、主として、教員と学士課程の学生である。大学院生は、多くの場合には個人研究をしているために、ほとんど訪れない (C)。

## 3. 古典学研究科におけるレファレンス・サービス

古典学研究科では、科目関連指導などの学習支援を受ける学士課程の学生は優等学位プログラムを受講する約 20 名のみである。それ以外の

180 名については、他の専門分野の授業科目で科目関連指導を受ける可能性はあるが、古典学科の授業科目ではほとんどない。フィールド・ライブラリアンによる学習支援を受ける機会を持たない 180 名の学生については、教員や TA が必要だと判断したときに、フィールド・ライブラリアンのオフィスを訪問するように伝えている。そのために、学士課程の学生に支援の案内をしてはいないが、学士課程の学生もオフィスを訪問して質問をする。ある学生がデータベースを上手く利用できないと言ってフィールド・ライブラリアンのオフィスをたずねてきたときに、オフィスの前室にあるコンピュータ演習室で探索法を示しながら説明をしたこともある。古典学研究科では、フィールド・ライブラリアンのオフィスに立ち寄って質問をするのは、多くの場合、教員や大学院生である。日常の交流等を通して明らかになった大学院生のニーズをもとに、研究に役立つ芸術関係のデータベースや百科事典に関する情報検索ワークショップをオフィスの前室にあるコンピュータ・ラボで実施している。同様の方法で、1 学期あたり約 8 つのワークショップを実施したこともある (D)。

作成中の論文に必要なデータを収集するために、学生にそのテーマを担当する図書館員を紹介することもある。ドイツ語学科の優等学位プログラムを受ける学生は論文を作成する必要があるが、そのテーマは多様である。そのために、芸術をテーマに設定した学生に芸術分野を担当する図書館員を紹介したり、ドイツの企業をテーマに設定した学生にビジネス図書館の図書館員を紹介したりすることもある (D)。

学生から受ける質問は 1 日あたり数件である。その多くを、電子メールや電話などレファレンス・デスク以外で受け付けている。学士課程の学生は電子メールで連絡をしてくることが多い。教員が学生にフィールド・ライブラリアンに質問をするように伝えと、学生は、職員録や研究科内の掲示板で連絡先の情報を得て、電子メールで質問を送付する (D)。

古典学研究科では、質問にいつでも対応できる

ように、博士課程の学生と教員にフィールド・ライブラリアンの携帯電話の番号を伝えている。学士課程の学生には、伝えていない。その理由は、これまでの経験から、学士課程の学生は些細なことでもすぐに連絡を取ろうとすると考えたからである。通常は、博士課程の学生が夜間にデータベースにアクセスできないなどコンピュータ関係の緊急事態が発生したときに連絡をしてくるくらいである。だが、自宅にいるときでも、就寝時以外は支援できる体制を整えている (D)。

#### D. 印象づけ

フィールド・ライブラリアンは、研究科の構成員にその存在と役割を知らせるために、多様な方法で印象づけをしている。研究科の建物内での日常的な交流が何よりの印象づけであるが、それ以外にもいろいろな工夫をしている。

芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンは、新入生の図書館への関心を高めるために、クイズを出している。情報探索、影響を受けた資料、読書、今学期に与えられた研究課題に関するクイズと、獲得した点数ごとの図書館(員)の利用法について記載したしおりを作成して、学生用のポストに配布している<sup>86)</sup>。米国の雑誌で性格診断に関する短いクイズを掲載していることがよくあるために、これを参考にして作成した。このしおりによって、より多くの学生がオフィスを訪問するようになったという明確な成果を得てはいないが、学生に図書館や図書館員の存在を印象づけることが重要だと考えて配布し続けている。

芸術・デザイン研究科では、2012年に、夏季休暇中に実施される新入生のためのオリエンテーションで新入生が大学を訪れるときに、2、3名の学生のグループをオフィスに招いて短時間の案内をした。そこでは、フィールド・ライブラリアンの役割、オフィスの位置に加えて、フィールド・ライブラリアンがレポートや芸術作品を作成するために必要になる資料の探索を支援できることなどを伝え、図書館のノベルティ・グッズであるボールペン、URLが印刷されたポストイット、

地図その他の案内を渡している。すべての新入生に対応するために、週あたり2日、1日あたり2時間程度をこの案内に費やしている。この案内を始めたきっかけは、オリエンテーションを担当する研究科のスタッフが提案をしたことによる。フィールド・ライブラリアンも、居眠りをする学生がいる講堂での大人数に向けた説明よりもよい方法だと考えて、これを受けた (C)。

以上に加えて、研究科のWeb上の職員録では、学生がいつでも参照できるように、フィールド・ライブラリアンの氏名、連絡先、業務内容等を顔写真とともに掲載している<sup>62)</sup>。また、「芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンからのニュース」と題するブログを作成して、学内で開催されるイベントの案内等をしている<sup>87)</sup>。

古典学研究科では、事務室の前の廊下に設置した掲示板の「ファカルティと会おう (Meet the Faculty)」というコーナーに、教員と並んで、フィールド・ライブラリアンが「図書館員 (Librarian)」として顔写真、連絡先 (電子メール、オフィスがある建物と部屋番号、電話番号)、関心をもつ領域とともに紹介されている<sup>88)</sup>。また、研究科のWeb上の職員録でも、フィールド・ライブラリアンの氏名や連絡先を顔写真とともに掲載している<sup>89)</sup>。

古典学研究科では、毎年30～40名の大学院生の志願者が大学を訪れる。フィールド・ライブラリアンは、大学院生の志願者に研究科が所蔵する図書館や中央図書館を案内している。古典学関係の資料のリスト、フィールド・ライブラリアンが提供するサービスやコレクションを記した手紙を送付することもある。他大学では研究科の図書館員が大学院生に面談したり手紙を送付したりすることはないために、フィールド・ライブラリアンがいるという理由でミシガン大学の古典学研究科に進学を決めた大学院生もいる。ハーバード大学とミシガン大学のいずれかに進学しようと考えていたある英国からの留学生に、フィールド・ライブラリアンが、ミシガン大学のコレクションやサービスを案内したり、フィールド・ライブラリ

アの役割等を紹介したりして、ミシガン大学を売り込んだこともあった。案内した内容は、その留学生が提出した書類から得た情報をもとに、留学生の研究テーマを反映させたものにした(D)。

## VII. 教員に対する教育活動の支援

### A. 新規採用教員の候補者への支援

担当する部局を新規採用教員の候補者(以下、候補者という)が面談で訪問するときに、フィールド・ライブラリアンが図書館の案内をすることもある。

芸術・デザイン研究科では、候補者に図書館を案内したことがあるが、一回だけのことで、通常は対応していない(C)。

古典学研究科では、フィールド・ライブラリアンが候補者に、1時間、時には30分で、図書館を案内している。案内時には、図書館が提供するサービスやコレクションについても説明し、図書館のリーフレットや地図を入れたフォルダーを渡している。2007年にローマの共和制について研究する3名の候補者を迎えた時には、1時間の面談を行った。案内したのは研究科が管轄するすべての図書館(室)と中央図書館である。これに加えて、候補者による図書館に関する質問に対応した。候補者からの主な質問として、図書館の予算、相互貸借等のサービス、図書館内にある教員用のオフィス、貸出期間などに加えて、古典学のコレクションが他の大学と比べてどの程度の強みを持つのかがある。自分が担当する授業科目でフィールド・ライブラリアンからどのような支援を受けられるのかについてたずねる候補者もいる(D)。

この時点で、フィールド・ライブラリアンから候補者に質問をしたり候補者のニーズをたずねたりすることはない。だが、候補者の方からニーズを伝えてくることがある。デジタル関係のプロジェクトを始めようと考えていた候補者が支援を希望したために、着任後に連絡を取るように伝えたことがある。この候補者の着任後にすぐに連絡があったために、フィールド・ライブラリアンが学内のIT担当の専門職員を紹介した。ITの専門

職員は、そのニーズをもとに、教員がプロジェクトのデータを管理できるハード・ドライブ、データ保管庫などの仮想的な作業空間を提供した。他にも着任後すぐに、連絡をしてきた教員がいる。具体的には、テクノロジーについて高い関心を持つ教員がプロジェクトのために図書館のサーバーやプログラマーからどのような支援を受けられるのかとたずねてきたり、情報リテラシーに関心を持つ教員が担当する授業科目の準備のために利用できる教育支援についてたずねてきたりしたことがある。また、ある教員は自身の研究のために利用できる研究支援についてたずねてきた(D)。

候補者の多くは、東部の研究大学にも同時に雇用の申請をしている。多くの場合、就職の面談時に図書館を案内するのはミシガン大学だけだと言う。図書館ツアーでは、図書館のコレクションやサービスに加えて、フィールド・ライブラリアンによる支援について説明し、ミシガン大学に対する候補者の関心を高めようとしている。特に、古典学研究科内に専属の図書館員としてフィールド・ライブラリアンがいること、フィールド・ライブラリアンからいつでも支援を受けられることの印象づけを図っている。候補者たちは、フィールド・ライブラリアンと面談をする前に研究科の他の教員との面談を済ませている。教員との面談で、すでにフィールド・ライブラリアンについて説明を受けていることもある。ある教授は、候補者との昼食会の時に、フィールド・ライブラリアンの役割と機能について説明をしていた。フィールド・ライブラリアンが他の業務等で対応できない時には、図書館の同僚に対応を依頼する。その理由は、すべての候補者が図書館に関する説明を受けることが重要だと考えるからである(D)。

候補者への支援はフィールド・ライブラリアンが着任時に候補者への支援の必要性について部局に提案をしたことに始まった。だが、候補者とフィールド・ライブラリアンとの面談を組み入れるように部局に繰り返し提案しても、数年に一度のことになるために部局の関係者は忘れることが多かった。そのために、機会を見つけて人事を担

当する事務職員に何度もその必要性を伝えていた (D)。提案の根拠となっているのは、前任校での経験と、候補者による着任先の決定要因を分析した 1980 年代の論文である。その論文では、テキサス州の 8 つの大学 (4 つの州立大学と 4 つの私立大学) の教員への聞き取りをもとに候補者が着任を決定する要因を分析している。最上位もしくはその次の要因として図書館の質があり、大学の評判や名声、給与や地理的な位置づけよりも高く位置づけられていることを明らかにした<sup>90)</sup>。古典学研究科のフィールド・ライブラリアンは、この論文を読んで、自身が大学や図書館の広報をする立場にもあると考えて、候補者への対応を提案した。候補者の来訪に関する情報について、近年では、研究科長やその秘書が伝えてきたり、教員会議でその情報を得たりもしている。その場合にも、研究科長や秘書に、折に触れてその必要性を伝えている (D)。

## B. 新任教員との面談

フィールド・ライブラリアンは、担当する研究科に新任教員が着任した時に、個別に面談をして、その存在と役割を印象づけたり、新任教員のニーズを把握したりしている。

芸術・デザイン研究科では、新任教員が着任したという情報を得ると、その教員に電子メールを送り、「私は図書館員です。先生がなさっていることを知りたいので、一度面談の時間をいただきたいと考えています。図書館について少し話をさせて下さい」と伝えている。多くの新任教員がこれに返信をして、面談をする。面談をすることが必須ではないために、返信のない教員には、この時点では、それ以上の連絡を取らない (C)。

面談では、その教員がどのような芸術活動をしているのか、他に何をしているのかについてたずねる中で、図書館が所蔵している資料やコレクションの紹介をしている。また、フィールド・ライブラリアンの役割、いつでも支援できることなどを伝えている。そして、図書館のリーフレットや地図、フィールド・ライブラリアンの名刺などを詰めた案内用のフォルダーを渡している (C)。

面談では、フィールド・ライブラリアンが教員の担当する授業科目で科目関連指導を実施できることについても伝えている。多くの場合に、新任教員はその場で科目関連指導を依頼する。そして、しばらくたった後に、新任教員が、担当する授業科目で与える課題に関する詳しい情報をフィールド・ライブラリアンに送付する。これをもとに、フィールド・ライブラリアンは、課題のテーマに即した学習支援を計画している (C)。

面談の場所は、フィールド・ライブラリアンの着任直後には、新任教員のオフィスだったが、教員の希望により、フィールド・ライブラリアンのオフィスを使用することが多くなった。だが、教員が希望すれば、その教員のオフィスで面談をしている (C)。

新任教員が着任するという情報については、研究科長の秘書に頼んでおいてリストを送ってもらうこともあれば、中央図書館のメーリングリストで得ることもある。このメーリングリストでは、「今年に着任する教員のリストです。連絡を取ってみて下さい」などの案内とともに、全学の新任教員のリストが送られてくる (C)。

## C. テクノロジー関係のワークショップ

フィールド・ライブラリアンは、研究科の教員から受ける質問等からニーズを汲み上げて、ワークショップ等を設計したり実施したりすることがある。

女性学研究科では、新しいデータベースを導入したりベンダーを変更したりしたときに、個人や少人数のグループを対象として、データベースを用いた情報の検索法に関するワークショップを実施している (B)。

芸術・デザイン研究科では、学習管理システム (C-Tool) の利用法に関するワークショップを実施している。2 日間で実施することもあれば、90 分程度で実施することもある (E, F)。ワークショップでは、過去の使用例を示しながら、フィールド・ライブラリアンと中央図書館の図書館員の 2 名が講師となって説明し、演習をする。ワークショップの案内については、各学期の始め



に、フィールド・ライブラリアンが電子メールで部局の教員に送付している (F)。ワークショップを開催すると多くの教員が参加するために、教員のニーズが高いと考えて、研究科長に相談をして、教員会議で学習管理システムの操作法について説明をしたこともある (C)。教員は、ワークショップ等に参加するだけでなく、個別にフィールド・ライブラリアンのオフィスを訪ねて操作法についての理解を深めている (F)。フィールド・ライブラリアンからも、機会があるごとに、個別に支援できることを電子メールで伝えている (C)。

古典学研究科では、教員からの依頼に応じて多様な教育支援を実施している。グループ単位でワークショップを実施することもあれば、一対一のセッションをすることもある。教員は教育支援を受けていることを他の教員に知られるのを心配する傾向があるために、個人単位で支援することが多い (D)。

#### D. レファレンス・サービス

フィールド・ライブラリアンのオフィスが研究科の建物内にあり、研究科での滞在時間が長いために、学生だけでなく、教員もオフィスに立ち寄って質問をする。女性学研究科のある教員は、データベースの探索中に問題が生じて、「データベースをうまく検索できないのですが、助けてくれませんか」とオフィスに駆け込んできたことがある。ソフトウエアの操作時にも同じ問題が発生することが多いようで、同様の現象が見られる (B)。

質問の内容は多岐にわたるが、データベースや学習管理システムを含む新しいテクノロジーに関する質問も多く受ける。次は、フィールド・ライブラリアンのオフィスに質問を持ち込んだ教員の例である。

多くの情報資源がオンライン上にあるのはわかっていますが、上手く見つけられないことが多く、問題が生じるたびに、オフィスを訪ねます。〔芸術・デザイン研究科〕 (E)

オンライン上の情報資源の探索法、コレクションへのナビゲーション、文献の購入についてたずねます。〔古典学研究科〕 (H)

図書館に関する問題が生じたらいつでも、オフィスを訪ねます。月に3, 4回はこの方法で質問をします。これまでに、貸出規則についてたずねたこともあれば、大学全体の運営会議で図書館関係の話題がでた後にフィールド・ライブラリアンの意見を聞いたこともあります。〔古典学研究科〕 (G)

電子メールや電話では質問をしにくいと考える教員が多いために、オフィスで質問を受けることが多くある (B)。その場で回答することもあるが、後日に電子メール等で回答することもある (E)。

研究科の廊下や談話室で偶然会ったときに、質問を受けることもある。芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンが、研究科の教員から「データベースをうまく使えないのですが」という質問を受けた時には、その場で少し話を聞いた後に、コンピュータをオフィスに持って来てもらい対応をしたことがある。その教員がすぐに来られない時には、面談の予約を取ってもらうこともある (C)。また、研究科の建物内でフィールド・ライブラリアンと一緒にコーヒーを飲んでいった教員が「そう言えば、〇〇のコレクションについて上手く探索できなかったのです」と質問を思い出したこともあった (B)。古典学研究科のフィールド・ライブラリアンは、研究科のラウンジでコーヒーを飲んだり昼食をとったりするとき、廊下で会ったりするときに教員と交流をしている。教員たちがよく質問をしてくるのは、オフィスにいるときよりも、廊下で会ったときである (D)。

研究科の建物内だけでなく、研究科のイベントで外出したときに質問を受けることもある。古典学研究科のフィールド・ライブラリアンは、研究科が主催するピクニックや野球観戦などのイベントに参加したときに、質問を受けたことがあ

た。そのような場合でも、気軽に応対し、その場で回答できるものについては回答するようにしている (D)。

フィールド・ライブラリアンが学習したことのない内容についての質問を受けることもあるために、新しいソフトウェアの知識などを必要だと感じた時には、大学や図書館が主催するワークショップに参加して知識や技能を習得し、ここで得たことを研究科の関係者に伝えている。そのために、常に新しいことを学習している。最近では、大学が電子メールを G-mail に切り替えたために、Google カレンダーや Google 関係のソフトウェア等に関する質問が増えることを予測して、Google 関係の内容を勉強している。他のソフトウェアについても、学内で開催されるワークショップに参加して修得し、フィールド・ライブラリアンが研究科の関係者を直接指導できるようにしている (C)。

質問には、レフェラル・サービスで対応することもある。他の分野を担当する図書館員を紹介することが多いが、学内の教育研究支援組織を案内することもある。南アメリカやインカ文明の研究を始めた古典学研究科の教員には、ラテン・アメリカ研究を担当する図書館員を紹介した。また、新しいテクノロジーの利用について質問をしてきた教員には、Faculty Exploratory が提供するワークショップを受けるように薦めたり、Knowledge Navigation Center にたずねるように案内したりしている。Faculty Exploratory はミシガン大学に所属する教員が教育、研究、出版活動を向上させるための新しいテクノロジーの利用を支援する組織で、Knowledge Navigation Center は教員によるテクノロジーの利用を支援する組織である。いずれも教員対象のワークショップを日常的に開催したり、教員を個別に支援したりしている (D)。

多くの教員は自分に知らないことがあることを認めようとしない傾向があるために、フィールド・ライブラリアンはこの問題を解決するひとつの方法だと考えられている。古典学研究科のフィールド・ライブラリアンのオフィスに年配の

教員が訪れ、「○○のやり方がわかりません。教えてくださいませんか」と問いかける。フィールド・ライブラリアンが着任する前には、図書館関係者にこのようにたずねることはなかったという (D)。研究科においてフィールド・ライブラリアンとの個人的な交流が深まっているために、このように質問をすることができるようになっている。芸術・デザイン研究科のある教員は、フィールド・ライブラリアンが着任する以前には、図書館員と長時間にわたって話すことはほとんどなく、「○○に関する本を探したいのですが」という質問と回答だけのやりとりで終わっていた。だが、フィールド・ライブラリアンであれば、「○○についてリサーチをしているのですが、何かアドバイスはありますか」とより発展的な質問をしようという気持ちになっている (F)。

## E. 印象づけ

フィールド・ライブラリアンは、研究科の建物内での日常的な交流、電子メール、教員会議等を活用して、その存在や役割を研究科の教員に印象づけている。研究科の関係者と直接的な交流の機会を多く持つことは、フィールド・ライブラリアンと他の図書館員の最も異なる点である。

女性学研究科のフィールド・ライブラリアンは、夏季休暇が始まる前に、研究科の教員や大学院生に電子メールで教育支援の案内を送付している。次の秋学期に必要な視聴覚資料のリクエスト制度の案内である<sup>91)</sup>。これに加えて、教員には研究支援の案内もしている。その内容は、フィールド・ライブラリアンが夏の間もキャンパスにいて、研究やプロジェクトをいつでも支援できることである<sup>92)</sup>。着任当初には、研究科のすべての教員と大学院生に機会がある毎に電子メールを送付して、情報資源、図書館が提供しようとしているサービスやワークショップ、新しい試み、新しい目録、研究科の関係者が知っておいた方がいいと思う事項等について知らせていた。だが、個々の教員のニーズを把握するようになってからは、個別に案内を送付することが多くなった (B)。

芸術・デザイン研究科を担当するフィールド・ライブラリアンの着任時には、研究科長が電子メールで研究科の全教員にフィールド・ライブラリアンを紹介した。その後、フィールド・ライブラリアン自身も提供できる支援について、教員に電子メールで案内している (F)。また、各学期が始まる前には、研究科の教員に電子メールを送付して、科目関連指導を担当できることを伝えている (C)。電子メール以外でも、図書館員が多様な情報の利用を支援できることを機会がある毎に伝えている。その理由は、教員は、図書館員が図書の探索を支援できることを知っているが、芸術関係のプロジェクトに必要な資料や情報の探索についても支援できることを知らないからである。また、研究科の学生や教員と話す機会があるときに、いつでも相談を受けられることを伝えたり、オリエンテーションや科目関連指導のときに、教員からの質問にも対応できること、それこそが自分の仕事のもっとも楽しい部分であることを強調したりしている<sup>23)</sup>。

古典学研究科のフィールド・ライブラリアンは、毎月開催される研究科の教員会議で、図書館に関する新しい事項について教員に伝えている。ラテン語やローマ帝国に関する情報の探索手段が更新されたときには、教員会議で報告した<sup>93), 94)</sup>。新しい事項については、会議の場だけでなく、電子メールで伝えることもある (G)。研究科の建物内でフィールド・ライブラリアンを見かけることによって、図書館やコレクションの現状、ツールの探し方について思い出すという教員もあり、フィールド・ライブラリアンが研究科の建物内にいること自体が図書館サービスの広報の役割を果たしている (H)。

## F. コレクションの構築

フィールド・ライブラリアンの主な業務に、担当する研究科の学問分野に関するコレクションの構築がある。

芸術・デザイン研究科を担当するフィールド・ライブラリアンは、図書館全体の芸術とデザインに関するコレクションの構築に携わっている。コ

レクションには、図書だけでなく、学術雑誌、視聴覚資料、データベース、美術書などを含む。芸術やデザインに関するコレクションについては、主に北キャンパス図書館が所蔵している (C)。

古典学研究科を担当するフィールド・ライブラリアンは、ミシガン大学における古典学に関するすべてのコレクションの構築を担当している。エフォートの約 70% を割り当てるほどコレクションの構築を重視している。その理由として、研究科の関係者との交流をとおして、研究科の教員や学生が古典学のコレクションを十分でないと考えていることが明らかになったことがある。そのために、研究科の関係者のニーズ、カリキュラムや研究テーマを反映させたコレクションの充実に努めている。必要に応じて、教員から助言を得ることもある。ミシガン大学は、北米で最も大きな古典学研究のコレクションを持つために、関連文献についてはほぼ網羅している。だが、海外の小さな出版社が出す本等については所蔵がないこともあり、教員がその情報を連絡してきたこともあった (D)。

フィールド・ライブラリアンは、教員と毎日のように話をする機会を持つために、教員がどのような論文を書いているのかを把握している。教員が何を研究しているのかを把握しておくことが支援をするために重要だと考えるからである。これによって、教員のニーズにより適したコレクションを構築することができる。更には、研究科の建物内での教員や学生との会話の中で、コレクションに関するニーズや必要な文献のテーマに気づくこともある。教員は研究テーマを変更したり新しいテーマに取り組んだりすることもあるので、その情報を知るよい機会にもなる (D)。

コレクションの充実には、寄付によって実現することもある。通常は、図書館内にある寄付関係の業務を担当する職員 (development officer) に、研究科のニーズを事前に伝えているために、この職員がこれをもとに慈善家と交渉をする。稀な例として、古典学のコレクションに多額の寄付をしたある卒業生には、フィールド・ライブラリアンが関連する文献のリストを作成して渡したことが

ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ：フィールド・ライブラリアンの活動を中心に  
ある (D)。

## G. 研究科が主催する行事の支援

フィールド・ライブラリアンは、担当する研究科が主催する行事や、研究科の教員が企画する行事に協力することもある。

芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンは、2006年に研究科が開催した本の展示会 (the book show) を教員と一緒に企画・運営した (C)。展示場では、フィールド・ライブラリアンが作成した展示本に関する説明や関連するデータベースの案内を、フィールド・ライブラリアンの自己紹介とともに掲示した<sup>95)</sup>。他に、教会で使用されているアフリカ系アメリカ人の扇子を研究する教員のために、扇子に関する文献に加えて、これに詳しい人物情報についても提供したことがある。この教員は、ここで得た情報をもとに、扇子の展示会を開催したために、結果的には展示会を開催するための支援をしたことになった (C)。

古典学研究科を担当するフィールド・ライブラリアンは、研究科が主催する国際学会の文献の展示会を担当している。研究科の教員が古典学関係の文献の専門家であるフィールド・ライブラリアンに展示会への協力を呼び掛けたのが始まりである (D)。

## VIII. まとめと今後の課題

### A. まとめ

本稿の目的は、ミシガン大学のフィールド・ライブラリアンのケース・スタディをもとに、「図書館が実施する学習支援や教育支援において、教員と図書館員はどのように連携しているのか」という研究課題を明らかにすることである。本稿で明らかにした主な内容は次のとおりである。

- ① フィールド・ライブラリアンは、研究科の教員や学生に学習支援や教育支援などの図書館サービスを提供するために研究科に派遣された図書館員で、研究科の建物内にオフィスを持つ。
- ② 利用サービス担当の部長が、図書館員が

教員の教育活動や研究活動と一体化して活動するための戦略として、フィールド・ライブラリアンの導入を提案した。

- ③ 女性学研究科、芸術・デザイン研究科、古典学研究科にフィールド・ライブラリアンを設置した。その後、廃止する研究科と、新たに導入する研究科が出現した。
- ④ フィールド・ライブラリアンは、それぞれが担当する研究科にオフィスを構え、研究科の関係者と交流を深める中で、そのニーズを明らかにし、部局や教員との連携をもとに個人やグループを対象にした多様な学習支援や教育支援を実施している。

本稿では、記述的なケース・スタディによって、ミシガン大学図書館のフィールド・ライブラリアンが実施する学習支援・教育支援の全体像について説明した。今後は、解釈的ケース・スタディによって、学習支援・教育支援をとおして、フィールド・ライブラリアンが教員を始めとする研究科の関係者との連携をどのように構築してきたのかについて構造的に分析する。

### B. 今後の課題

本研究の今後の主な課題は、次のとおりである。

- ① ミシガン大学の記述的ケース・スタディ (本稿) をもとに、解釈的ケース・スタディを作成する。
- ② ①の解釈的ケース・スタディで明らかにしたモデルを、他大学／カレッジのケース・スタディをもとに構築したモデルと比較する。
- ③ ①②で構築したモデルを、大学教育における教員と図書館員の連携に関する先行研究や関連する既存の理論と比較しながら、より汎用性の高いモデルを構築する。

近年、新しい図書館員のモデルとして、エンベディッド・ライブラリアン、ブレンディッド・ラ



イブラリアン (blended librarian) などが出現している<sup>29),96)</sup>。これらの新しい図書館員に求められる役割は、いずれも利用者との関係を深めながら利用者志向の学習支援や教育支援を提供することである。今後の課題として、上記の比較対象に、これらの図書館員が所属するケースを加えることも含まれる。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、多くの支援を頂戴しました。ウエイン州立大学 (Wayne State University) 図書館情報学研究科の名誉教授である Ronald Powell 先生は、研究計画について指導し、訪問調査のためにミシガン大学の図書館に紹介状を出して下さいました。ミシガン大学の Laurie Alexander, Anne Beaubien, Doreen Bradley, Beau Case, Karen Downing, Kathleen Folger, Mrija Freeland, Bruce Frier, Suzanne Gray, Anette Haines, Philip Hallman, Carol Jacobsen, Brenda Johnson, Matthew Kaplan, Anne Karle-Zenith, Deborah Lauseng, Vilma Mesa, Michael Miller, Kenji Niki, Jim Ottaviani, Rebecca Price, Gurpreet Rana, Amy Robb, Scott Specter, Matt Stoeffler, Laurie Sutch, Satoru Takahashi, Linda TerHaar, Patricia Yocum の各氏は訪問調査及び電子メールでの追跡調査、内部資料の収集にご協力下さいました (所属は調査当時)。ミシガン大学図書館の Robert Fraser, Helen Look, ウエイン州立大学の Purgy Library, 長崎大学附属図書館, 三重大学附属図書館の関係者は、関連情報の調査にご協力下さいました。査読者の方は、多くの貴重な示唆を下さいました。筑波大学大学院図書館情報メディア研究科の名誉教授である葉袋秀樹先生は研究計画から本稿の執筆まで丹念にご指導下さいました。ご指導・協力下さった方々に、心よりお礼を申し上げます。

本研究は、2006 年度及び 2007 年度の科学研究費 (若手研究 B)「教育活動を背景とする教員と図書館員のパートナーシップ: ミシガン大学の事例をもとに」の助成を受けています。

## 注・引用文献

- 1) 中央教育審議会. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて: 生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (答申). 文部科学省. 2012. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm), (参照 2012-12-24).
- 2) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会. 大学図書館の整備について: 変革する大学にあって求められる大学図書館像 (審議のまとめ). 文部科学省. 2000. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm), (参照 2011-11-23).
- 3) 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科. 「大学図書館の経営に関する調査」集計結果. 今後の「大学像」の在り方に関する調査研究 (図書館) 報告書. 2007, p. 95-131.
- 4) 国内の例として, 日本図書館学会研究委員会編. 図書館における利用者教育. 日外アソシエーツ, 1994, 248p. (論集・図書館学研究の歩み, 14).
- 5) 国外の例として, Hardesty, L.; Schmitt, J. P.; Tucker, J. M. eds. User Instruction in Academic Libraries. Scarecrow Press, 1986, 311 p.
- 6) 例として, Carlson, D.; Miller, R. H. Librarians and teaching faculty: partners in bibliographic instruction. College and Research Libraries. 1984, vol. 45, no. 6, p. 483-491.
- 7) Rader, Hannelore B. "Collaboration". Information Literacy Instruction Handbook. Cox, C. N.; Lindsay, E. B. eds. Association of College and Research Libraries, 2008, p. 84-93.
- 8) 中央教育審議会. 学士課程の構築に向けて (答申). 文部科学省. 2008. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm), (参照 2013-02-11).
- 9) 例として, Nims, J. K.; Andrew, A. eds. Library User Education in the New Millennium. Pierian Press, 2001, 202 p.
- 10) 例として, 金丸明彦, 下田研一, 長澤多代. 長崎大学におけるファカルティ・ディベロップメント・プログラム. 大学図書館研究. 2003, no. 69, p. 1-14.
- 11) Branscomb, H. Teaching with Books. American Library Association; Association of American Colleges, 1940, 239 p.
- 12) Knapp, P. B. The Monteith College Library Experiment. Scarecrow Press, 1966, 293 p.
- 13) Farber, E. I. "College librarians and the university-library syndrome". The Academic Library. Far-

- ber, I. E.; Walling, Ruth eds. Scarecrow Press, 1974, p. 12-23. (再掲: User Instruction in Academic Libraries. Hardesty, L. L.; Schmitt, John P.; Tucker, J. M. eds. Scarecrow Press, 1986, p. 243-253.)
- 14) Hardesty, L. L. Faculty and the Library: The Undergraduate Experience. Ablex Publishing, 1991, 170 p.
- 15) Julien, H.; Pecoskie, J. Librarian's experiences of the teaching role. Library and Information Research. 2009, vol. 31, no. 3, p. 149-154.
- 16) 長澤多代. アーラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ. Library and Information Science. 2007, no. 57, p. 33-50.
- 17) 長澤多代. 大学教育における教員と図書館員の連携を促す図書館員によるつながり方の開拓: アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに. 日本図書館情報学会誌, 2012, vol. 58, no. 1, p. 18-34.
- 18) 長澤多代. 大学教育における教員と図書館員の連携を促すカスタマイズ型の学習支援: アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに. 日本図書館情報学会誌, 2012, vol. 58, no. 4, p. 185-201.
- 19) Merriam, S. B. 質的調査法入門: 教育における調査法とケース・スタディ. 堀薫夫, 久保真人, 成島美弥訳. ミネルヴァ書房, 2004, 389 p.
- 20) Becker, H. S. "Social observation and social case studies". International Encyclopedia of the Social Sciences. vol. 11, Crowell, 1968, p. 233.
- 21) 長澤多代. 図書館情報大学振興会海外語学研究助成報告書. ゆうりす. 2002, no. 84, p. 20-24.
- 22) 例として, Lafon, F. S. K. A Comparative Study and Analysis of the Library Skills of American and Foreign Students at the University of Michigan. The University of Michigan, 1992, 209p, Ph.D. thesis.
- 23) Haines, A. Out in left field: The benefits of field librarianship for studio arts programs. Art Documentation. 2004, vol. 23, no.1, p. 18-20.
- 24) Johnstone, B. L.; Alexander, L. A. In the field. Library Journal. 2007, vol. 132, no. 2, p. 38-40.
- 25) ミシガン大学では, 第1回の調査で, 学習教育研究センターに所属する教育開発の専門職員, 情報リテラシー教育を担当する図書館員, 情報リテラシー教育を担当する図書館員の資質開発を支援する組織の図書館員にも聞き取りをしている。本稿では, これらのデータについては分析の対象外にしている。
- 26) Flick, U. 質的研究入門. 小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子訳. 春秋社, 2002, 410 p.
- 27) 野末俊比古. "情報リテラシー教育をめぐる理論". 情報リテラシー教育の実践: すべての図書館で利用教育を. 図書館利用教育委員会編. 日本図書館協会, 2010, p. 13-14.
- 28) 国立教育政策研究所 FDer 研究会編. 大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン. 国立教育政策研究所, 2009, 26 p.
- 29) 鎌田均. 「エンベディッド・ライブラリアン」: 図書館サービスモデルの米国における動向. カレントアウェアネス, 2011, no. 309, p. 6-9.
- 30) "World's best universities: Top 400". U.S. News. <http://www.usnews.com/education/worlds-best-universities-rankings/top-400-universities-in-the-world>, (accessed 2009-05-05).
- 31) 2008 年秋学期のデータ. "All about Michigan". The University of Michigan. <http://mmd.umich.edu/forum/michigan.php#brief>, (accessed 2009-05-05).
- 32) "Subject Specialists". The University Library at the University of Michigan. <http://www.lib.umich.edu/subject-specialists>, (accessed 2011-11-05).
- 33) "Libraries". The University Library at the University of Michigan. <http://www.lib.umich.edu/libraries>, (accessed 2011-11-05).
- 34) 内部資料: The University Library at the University of Michigan. The University of Michigan. (入手 2007-12-05).
- 35) 内部資料: The University Library at the University of Michigan. Public Services Division. 2005.9. (入手 2007-12-05).
- 36) "University Library Staff Directory". The University Library at the University of Michigan. <http://www/lib.umich.edu/staff/staffdir/>, (accessed 2007-12-05).
- 37) 内部資料: 2012 年 10 月から始まるミシガン大学図書館の組織体系図 (入手 2012-09-26).
- 38) "Chapter IV: The University Senate". Board of Regents of the University of Michigan. [www.regents.umich.edu/bylaws/bylaws04.html#1](http://www.regents.umich.edu/bylaws/bylaws04.html#1), (accessed 2013-02-13).
- 39) 電子メール: ディアボーン図書館の学術資源担当の副分館長 (2013-02-13).
- 40) "Bylaws: Parts of Chapter IV Amended". Board of Regents (1966-1969). 1968-02. (入手 2013-02-15).
- 41) 内部資料: Promotion System for Librarians. Mardigian Library. The University of Michigan, 2001.1.31. (入手 2013-02-13).
- 42) "Faculty Exploratory". The University Library at the University of Michigan. <http://www.lib.umich.edu/faculty-exploratory>, (accessed 2012-09-05).

- 43) Alexander, L.; Gaither, R.; Tuckett, H. W. "That's infotainment! Effective orientation programs". First Impressions, Lasting Impact: Introducing the First-Year Student to the Academic Library. Nims, J. K.; Andrew A. eds. Pierian Press, 2002, p. 17-25. (Library Orientation Series).
- 44) 聞き取り: 学部学生用図書館の図書館員 (2004-05-12).
- 45) 聞き取り: 大学院生用図書館の図書館員 (2004-06-30).
- 46) "UM Library Instruction". The University Library at the University of Michigan. <http://www.lib.umich.edu/instruct/workshops.html>, (accessed 2009-05-05).
- 47) "UM Teaching and Technology Collaborative". The University of Michigan. <http://www.umich.edu/~teachtec/es.html>, (accessed 2009-05-05).
- 48) Yocum, P.; Brandley D.; Forrester A. Instructor College: Promoting development of library instructors. Integrating Information Literacy into the College Experience. Nims, J. K. et al. ed. Pierian Press, 2003, p. 199-203. (Library Orientation Series).
- 49) "Instructor College". The University Library at the University of Michigan. <http://www.lib.umich.edu/icollege/acrl2003.htm>, (accessed 2009-01-02).
- 50) 内部資料: Instructor College Steering Committee. E-Learning Task Force, Assessment Committee, Instructional Marketing & Orientation Task Force and Instruction Steering. (入手 2012-09-28).
- 51) "Instructor College Café". The University Library at the University of Michigan. <http://www.lib.umich.edu/instructor-college/cafe>, (accessed 2012-09-28).
- 52) 電子メール: 利用サービスの部長 (当時) (2013-01-15).
- 53) 電子メール: 利用サービスの部長 (当時) (2013-01-16).
- 54) 電子メール: 芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアン (2013-02-14).
- 55) 電子メール: 古典学研究科のフィールド・ライブラリアン (2012-09-27).
- 56) Web上で公開された女性学研究科のフィールド・ライブラリアンの公募要領. "Women's Studies field librarian". The University of Michigan. <http://www.inform.umd.edu/EdRes/Topic/WomenStudies/Employment/librarfieldws.html>, (accessed 2001-08-31) (入手 2004-06-29).
- 57) Web上で公開された美術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンの公募要領. Field Librarian—Art and Design. (accessed 2001-06-01) (入手 2012-09-26).
- 58) ビデオ制作者の監督について, 現在はそのポストがないために, 業務内容ではなくなっている. (電子メール: 芸術デザイン研究科のフィールド・ライブラリアン (2013-05-22))
- 59) "Subject specialist". The University Library at the University of Michigan. <http://lib.umich.edu/grad/guide/selector.php?id=81>, (accessed 2004-07-07).
- 60) "Senior associate librarian". The School of Art and Design. <http://art-design.umich.edu/people/>, (accessed 2011-11-11). なお, 参照した URL にはフィールド・ライブラリアンの個人名が記載されているために, ひとつ上位の URL を示している.
- 61) 内部資料: 芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンの履歴書. 2012.5. (入手 2013-02-14).
- 62) 内部資料: 古典学研究科のフィールド・ライブラリアンの履歴書. (入手 2007-12-05).
- 63) The Associates of the Museum. Staff update. Kelsey Museum Newsletter. 2002, spring, p. 10.
- 64) "Art & design field librarian". Art Architecture and Engineering Library. <http://lib.umich.edu/aael/person/php?personID=04>, (accessed 2004-06-22).
- 65) 内部資料: Position Description: Art & Design Field Librarian (draft). 2012.5. (入手 2012-09-26).
- 66) 観察記録: 女性学研究科の建物 (2004-06-22).
- 67) 内部資料: 芸術・デザイン研究科のフロア・マップ (入手 2012-09-26).
- 68) 電子メール: リエゾン・モデルの主任を務める健康科学図書館の図書館員 (2013-02-12).
- 69) 電子メール: 健康科学図書館の図書館員 (2013-02-13).
- 70) 電子メール: 建築学担当の図書館員 (2013-02-15). 4
- 71) "People". Women's Study. <http://www.lsa.umich.edu/women/people>, (accessed 2013-02-19).
- 72) "120: Undergraduate Enrollment by School or College, Field of Specialization, Class Level, and Gender". University of Michigan. Fall 2012, <http://www.ro.umich.edu/enrollment/enrollment.php>, (accessed 2013-05-23).
- 73) "103: Enrollment of Graduate Students by Field of Specialization, Class Level, and Gender, and Gender". University of Michigan. Fall 2012, <http://www.ro.umich.edu/enrollment/>

- enrollment.php, (accessed 2013-05-23).
- 74) "School Overview". The School of Arts and Design. <http://art-design.umich.edu/about>, (accessed 2013-02-19).
- 75) "Directory". Department of Classical Studies. <http://www.lsa.umich.edu/classics/directory>, (accessed 2013-02-19).
- 76) "Research and Technology Guide". The University Library at the University of Michigan. <http://guides.lib.umich.edu/index.php>, (accessed 2013-02-20).
- 77) 内部資料: "Course descriptions". School of Art & Design Undergraduate Student Handbook 2003-2004, p. 37. (入手 2004-06-22).
- 78) "Penny W. Stamps Speaker's Series". The School of Art & Design. <http://art-design.umich.edu/stamps>, (accessed 2011-10-30).
- 79) "Wilson W. Smith III". The School of Arts and Design. [http://art-design.umich.edu/stamps/detail/wilson\\_w\\_smith\\_iii](http://art-design.umich.edu/stamps/detail/wilson_w_smith_iii), (accessed 2013-01-14).
- 80) 内部資料: LSA Course Guide. (入手 2012-09-28).
- 81) 内部資料: Librarians and databases of interest to German honors students. 2007. (入手 2007-12-05).
- 82) 内部資料 (シラバス): Greek/Latin 600: Methods of Classical Scholarship. 3rd. version. 2003. (入手 2007-12-05).
- 83) 内部資料 (シラバス): Greek/Latin 600: Methods of Classical Scholarship. Fall 2005. (入手 2007-12-05).
- 84) Mann, T. Library Research Models: A Guide to Classification, Cataloging, and Computing. Oxford University Press, 1993, 248 p.
- 85) Jenkins, F. W. Classical Studies: A Guide to the Reference Literature. Library Unlimited, 1996, 263 p.
- 86) 内部資料: 芸術・デザイン研究科のフィールド・ライブラリアンが作成するしおりの原稿 (入手 2004-06-22).
- 87) News from the A&D Field Librarian. <http://artdes-librarian.blogspot.jp/>, (accessed 2013-02-10).
- 88) 観察記録: 古典学研究科の事務室 (2007-12-05).
- 89) "Staff". The Department of Classical Studies. <http://www.lsa.umich.edu/classics/people/staff>, (accessed 2011-11-11).
- 90) Cluff, E. D.; Murrah, D. J. The influence of library resources on faculty recruitment and retention. Journal of Academic Librarianship. 1987, vol. 13, no. 1, p. 19-23.
- 91) 内部資料: 女性学のフィールド・ライブラリアンが研究科の教員と大学院生に送付した電子メール (2004-04-30 に送付) (入手: 2004-07-07).
- 92) 内部資料: 女性学のフィールド・ライブラリアンが研究科の教員に送付した電子メール (2004-04-30 に送付) (入手 2004-07-07).
- 93) 内部資料: Classical Studies Faculty Meeting Agenda. 2007-11-28. (入手 2007-12-05).
- 94) 内部資料: Classical Studies Faculty Meeting Agenda. 2007-10-17. (入手 2007-12-05).
- 95) 内部資料: Curator's Choice. 2006. (入手 2012-09-26).
- 96) Bell, S. J.; Shank, J. D. Academic Librarianship by Design: A Blended Librarian's Guide to the Tools and Techniques. American Library Association, 2007, 181p.



## 要 旨

**【目的】** 近年、日本の大学では、教育の質保証を目指した大規模な改革を進めている。大学図書館でも、多様な取り組みによって教育の質保証に貢献しようとしている。その主な取り組みとして、学生に対する学習活動の支援（学習支援）がある。高い学習成果を得られる学習支援を実現するためには、授業と図書館利用の関連づけや教員と図書館員の連携が重要になる。その中で、大学図書館に対する教員の理解を深めることが重要になるために、教員に対する教育活動の支援（教育支援）についても検討することが必要になる。本稿の目的は、米国のミシガン大学のケース・スタディによって、「図書館が実施する学習支援や教育支援において、教員と図書館員はどのように連携しているのか」という研究課題を明らかにすることである。特に、2002年に導入されたフィールド・ライブラリアンに焦点をあてて、これを明らかにする。

**【方法】** 記述的なケース・スタディによって、上記の研究課題を明らかにする。対象とするデータは、聞き取りによって得られた情報、資料記録、管理文書、事例報告、学術論文、物理的環境に関する記録、直接観察によって得られた情報である。

**【結果】** 以上の調査により、次のことが明らかになった。(1) フィールド・ライブラリアンは、学習支援や教育支援などの図書館サービスを提供するために部局に派遣される図書館員である。(2) 図書館と部局との連携が十分ではなかったために、利用サービス担当の部長が、図書館員が教員の教育環境や研究環境と一体化して活動するひとつの方法として、フィールド・ライブラリアンの導入を提案した。(3) 女性学研究科、芸術・デザイン研究科、古典学研究科にフィールド・ライブラリアンを設置した。(4) フィールド・ライブラリアンは、それぞれが担当する部局にオフィスを構え、部局の関係者と交流する中で、そのニーズを明らかにし、部局や教員との連携をもとに多様な学習支援や教育支援を実施している。